

大分県内遺跡発掘調査概報10

2007

大分県教育庁埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は大分県教育委員会が平成18年度国庫補助金を得て実施した大分県内遺跡発掘調査事業の調査概要報告書である。
- 2 調査にあたって県農林水産部・県各地方振興局・県内農業基盤整備事業担当課・佐伯市教育委員会、大分森林管理署・県教育委員会理財課・宮崎県東臼杵郡北川町教育委員会の御協力をいただいた。
- 3 現地での写真撮影・遺構実測は調査員が担当した。
- 4 遺構図面・地図トレース等概報作成に伴う諸作業については、調査員が担当した。
- 5 本書で使用する方位は、1/5,000地図（大分県森林基本図）・大原越へ台場20の場合座標北であり、台場略図の場合は磁北である。
- 6 図面・写真等は大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 7 本書に使用した5万分の1図は戦前の陸地測量部が作成した「竹田」・「蒲江」・「佐伯」・「熊田」・「市場」である。
- 8 本書の執筆は高橋信武・小林昭彦・甲斐寿義・綿貫俊一が、編集は高橋が担当した。

目 次

はじめに	1
I 農業関係遺跡分布調査（綿貫）	1
安岐町朝来所在の六面石幢の調査（小林）	8
II 公立施設関係遺跡分布調査（甲斐）	10
III 西南戦争戦跡分布調査（高橋）	11
1 測量調査	
佐伯市宇目大原越へ	12
2 分布調査	
1. 佐伯市宇目大原越へ北部（県境から大原越への大分県内尾根）	15
2. 佐伯市直川（県境から内水に至る尾根）	17
3. 佐伯市直川（中ノ嶺西方から内水に至る尾根）	19
4. 佐伯市直川（中ノ嶺東方から杭の内に至る尾根）	21
5. 佐伯市直川（一ツ戸から杭の内に至る尾根）	23
6. 佐伯市直川（陸地峠から黒沢・道ノ内に至る尾根）	26
7. 佐伯市宇目大原越へ県境屈折点から中ノ嶺經由陸地峠	28
8. 佐伯市直川陸地峠西部一ツ戸	32
9. 佐伯市直川（陸地峠から豊予要塞石柱に至る尾根）	33
10. 佐伯市直川（豊予要塞石柱から東北方向の尾根）	35
11. 佐伯市佐伯（豊予要塞石柱から南東方向の尾根）	38
12. 佐伯市蒲江明石峠南部	40
13. 竹田市街西側	41
3 小 結	42
報告書抄録	46

はじめに

今年度は農林業関連事業・県立学校等の開発に対する分布調査を継続するとともに、西南戦争戦跡の分布調査を行った。

まず、農業関連分布調査であるが、平成18年度に大分県教育庁埋蔵文化財センターが市町村教委の協力を得て実施した県内の農林業関係事業（平成19年度工事予定地区）の埋蔵文化財分布調査は74箇所である。工事予定地に対する埋蔵文化財分布調査を平成18年9月に実施した後、追加調査を平成18年2月に実施した。また、県立学校等の事業についても分布調査を実施し、1件（宇佐高等学校）で試掘調査を実施した。

次に、西南戦争戦跡分布調査は星形や花びら形の多稜堡塁跡が集中する佐伯市宇目大原越へで、昨年度に引き続き測量調査を実施した。この他に佐伯市（佐伯・直川・宇目・蒲江）・竹田市で分布調査を行った。

調査組織

調査主体 大分県教育委員会

大分県教育庁

埋蔵文化財センター	所長	小玉 学司
	次長兼総務課長	岡本 義博
調査第一課	課長	栗田 勝弘
大型事業担当	主幹	高橋 信武・小林 昭彦・甲斐 寿義
	副主幹	綿貫 俊一・槇島隆二他

佐伯市教育委員会社会教育課

畦津宏幸

I 農業関係遺跡分布調査

平成18年度に大分県教育庁埋蔵文化財センターが市町村教委の協力を得て実施した県内の農林業関係事業（平成19年度予定地区）の分布調査は別表1～4のとおりである。分布調査は平成18年9月に当初予定分の7箇所で行った。平成19年1月にはその後事業実施が確定した追加分の4箇所で行った。その内訳は、A.周知遺跡内で確認調査の必要な箇所は4箇所、B.試掘調査の必要な箇所は13箇所、C.立会調査の必要な箇所は3箇所、D.事業実施に問題ない箇所51箇所、E.再度の分布調査必要箇所は3箇所である。上記の内、今年度中に調査を行ったのは1箇所（大分地方気象台建築改修工事に伴う立会調査）である。また、県立学校関係等の事業として分布調査を行ったのは宇佐県立宇佐高等学校管理棟・教室棟他建設工事である。

平成18年9月（11～21）、平成19年1月（26～31）に実施した県内遺跡分布調査結果

工事場所	実施面積 ha 実施延長 m	振興局名・課名	工事開始予定時期	関係市町村	判定
国東市国見町大字西方寺	200m	東部振興局 農林基盤部	平成19年 10月上旬～	国東市	D
大分市大字入蔵～沢田	400m	中部振興局 農林基盤部	平成19年 8月上旬～	大分市	D

工 事 場 所	実施面積 ha 実施延長 m	振興局名・課名	工事開始予定時期	関係市町村	判定
野津町大字白岩～東谷	400m	中部振興局 農林基盤部	平成19年 9月上旬～	臼杵市	D
臼杵市大字深江 津久見市大字長目	300m	中部振興局 農林基盤部	平成19年 9月上旬～	臼杵市 津久見市	D
佐伯市直川大字赤木	180m	南部振興局 農林基盤部	平成19年 9月上旬～	佐伯市	D
佐伯市大字青山	823m	南部振興局 農林基盤部	平成19年 9月上旬～	佐伯市	D
佐伯市大字青山	140m	南部振興局 農林基盤部	平成19年 9月上旬～	佐伯市	D
佐伯市直川大字仁田原	150m	南部振興局 農林基盤部	平成19年 9月上旬～	佐伯市	D
佐伯市宇目大字木浦内	250m	南部振興局 農林基盤部	平成19年 9月上旬～	佐伯市	D
佐伯市宇目大字木浦内	200m	南部振興局 農林基盤部	平成19年 9月上旬～	佐伯市	D
佐伯市宇目大字南田原	2,128m	南部振興局 農林基盤部	平成19年 9月上旬～	佐伯市	D
豊後大野市三重町 小坂～鶯谷	1,500m	豊肥振興局 農林基盤部	平成19年 9月上旬～	豊後大野市	D
竹田市直入町大字長湯	1,395m	豊肥振興局 農林基盤部	平成19年 8月上旬～	竹田市	D
日田市大字小野	1,400m	西部振興局 農林基盤部	平成19年 8月上旬～	日田市	D
日田市前津江町赤石 日田市中津江村合瀬	670m	西部振興局 農林基盤部	平成19年 8月上旬～	日田市	D
中津市山国町大字槻木	500m	北部振興局 農林基盤部	平成19年 8月上旬～	山国町	D
豊後高田市大字長岩屋	700m	北部振興局 農林基盤部	平成19年 8月上旬～	豊後高田市	市教委 試掘済み
杵築市山香町大字 野原～野原	2,300m	東部振興局 日出水利耕地事務所	平成19年8月1日	杵築市	B
大分市下戸次	200m	中部振興局 農林基盤部	平成19年6月1日	大分市	D
由布市庄内町 櫟木～東長宝	500m	中部振興局 農林基盤部	平成19年10月1日	由布市	B
臼杵市大字家野	400m	中部振興局 農林基盤部	平成19年6月1日	臼杵市	A
臼杵市大字搔懐	327m	中部振興局 農林基盤部	平成19年8月1日	臼杵市	A
臼杵市大字武山	防火水槽 1箇所	中部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	臼杵市	E
臼杵市大字高山	防火水槽 1箇所	中部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	臼杵市	E
臼杵市大字佐津留	防火水槽 1箇所	中部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	臼杵市	E
竹田市久住町大字白丹	巢原4工区 1.0ha 白丹町工区 3.0ha	豊肥振興局 基盤部	平成19年6月1日	竹田市	B

工 事 場 所	実施面積 ha 実施延長 m	振興局名・課名	工事開始予定時期	関係市町村	判定
竹田市大字挾田大字三宅	羽恵工区 16.5ha 三宅工区 5.1ha	豊肥振興局 基盤部	平成19年 6月 1日	竹田市	B
竹田市大字下坂田	下坂田東工区 16.5ha 下坂田西工区 5.6ha	豊肥振興局 基盤部	平成19年 6月 1日	竹田市	B
豊後大野市三重町小坂	500m	豊後大野事務所	平成19年10月 1日	豊後大野市	D
豊後大野市 大野町夏足、朝地町宮生	500m	豊後大野事務所	平成19年 6月 1日	豊後大野市	D
豊後大野市緒方町平石	600m	豊後大野事務所	平成19年 6月 1日	豊後大野市	D
豊後大野市大野町北園	200m	豊後大野事務所	平成19年10月 1日	豊後大野市	B
竹田市大字入田	12.1ha	豊肥振興局 大野川上流開発事業事務所	平成19年 10月 1日～	竹田市	B
竹田市大字太田	10.0ha	豊肥振興局 大野川上流開発事業事務所	平成19年 10月 1日～	竹田市	B
竹田市大字太田	3.3ha	豊肥振興局 大野川上流開発事業事務所	平成19年 10月 1日～	竹田市	B
竹田市大字戸上	403m	豊肥振興局 大野川上流開発事業事務所	平成19年11月 1日	竹田市	B
竹田市大字戸上	893m	豊肥振興局 大野川上流開発事業事務所	平成19年11月 1日	竹田市	B
	農道 3m～4m	市原氏	平成19年10月 1日	竹田市	C
日田市大山町西大山	(集落道) 500m	西部振興局	平成19年 5月 1日	日田市	D
日田市大山町西大山	(集落道) 100m	西部振興局	平成19年 5月 1日	日田市	D
玖珠群玖珠町大字戸畑	(ほ場整備) 3.0ha	西部振興局	平成19年 5月 1日	玖珠町	D
玖珠群玖珠町大字古後	(ほ場整備) 5.5ha	西部振興局	平成19年 5月 1日	玖珠町	D
玖珠群玖珠町大字古後	(ほ場整備) 17.6ha	西部振興局	平成19年 4月 1日	玖珠町	B
玖珠群玖珠町大字山田	路床工 300m 舗装工 600m	西部振興局	平成19年 4月 1日	玖珠町	D
玖珠郡玖珠町大字岩室	路床工 400m	西部振興局	平成19年 5月 1日	玖珠町	D
日田市中津江村合瀬	(集落道) 560m	西部振興局	平成19年 5月 1日	日田市	D
玖珠郡九重町後野上	農道工 650m	西部振興局	平成19年 5月 1日	九重町	D
玖珠郡九重町後野上	農道工 250m	西部振興局	平成19年 5月 1日	九重町	D
豊後高田市西真玉	1.2ha 400m	北部振興局 農林基盤部	平成19年 6月 1日	豊後高田市	D
豊後高田市田染小崎	1.5ha 500m	北部振興局 農林基盤部	平成19年 6月 1日	豊後高田市	D

工 事 場 所	実施面積 ha 実施延長 m	振興局名・課名	工事開始予定時期	関係市町村	判定
宇佐市院内町上船木	集落道 L=400m	北部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	宇佐市 院内町	D
宇佐市安心院町大仏	集落道 L=200m	北部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	宇佐市 安心院町	B
宇佐市安心院町釜口	集落道 L=200m	北部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	宇佐市 安心院町	D
宇佐市安心院町釜口	集落道 L=700m	北部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	宇佐市 安心院町	D
宇佐市安心院町古川	農道 L=900m	北部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	宇佐市 安心院町	D
宇佐市安心院町萱籠	農道 L=200m	北部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	宇佐市 安心院町	A
宇佐市安心院町上内河野	ほ場整備 A=2.0ha	北部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	宇佐市 安心院町	B
宇佐市安心院町上の原	パイプライン L=1,500m	北部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	宇佐市 安心院町	C
宇佐市安心院町松本	パイプライン L=1,500m	北部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	宇佐市 安心院町	D
宇佐市安心院町板場	パイプライン L=1,500m	北部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	宇佐市 安心院町	D
宇佐市院内町御沓	路床工 L=70.0m	北部振興局 農林基盤部	平成19年10月1日	宇佐市 院内町	D
宇佐市安心院町松本	路床工 L=200.0m	北部振興局 農林基盤部	平成19年10月1日	宇佐市 安心院町	D
宇佐市院内町来鉢	排水路工 L=200.0m	北部振興局 農林基盤部	平成19年10月1日	宇佐市 院内町	D
宇佐市大字南宇佐	路床工 L=200m	北部振興局 農林基盤部	平成19年10月1日	宇佐市	D
宇佐市院内町台	排土工 V=10,000m ³	北部振興局 農林基盤部	平成19年10月1日	宇佐市 院内町	D
宇佐市院内町大副	土取場 V=10,000m ³	北部振興局 農林基盤部	平成19年7月1日	宇佐市	B
中津市大字諸田	ほ場整備 A=6.0ha	北部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	中津市	A
中津市耶馬溪町深耶馬	農道 L=500m	北部振興局 農林基盤部	平成19年7月1日	中津市 耶馬溪町	D
中津市山国町長尾野	集落道 L=1,000m	北部振興局 農林基盤部	平成19年9月1日	中津市 山国町	D
豊後高田市草地	土取場 V=10000m ³	北部振興局 農林基盤部	平成18年10月1日	豊後高田市	D
杵築市山香町大字向野	1 ha	東部振興局 日出水利耕地事務所	平成19年9月～	杵築市	D
杵築市山香町 大字久木野尾	1 ha	東部振興局 日出水利耕地事務所	平成19年9月～	杵築市	D
臼杵市野津町大字王子	1,000m	中部振興局 農林基盤部	平成19年9月～	臼杵市	C
日田市大山町西大山	集落道 220m	西部振興局	平成19年9月～	日田市	D



写真1 白杵市野津町大字王子 農村振興整備事業



写真2 白杵市野津町大字王子 農村振興整備事業



写真3 白杵市野津町大字王子 農村振興整備事業



写真4 杵築市山香町大字久木野尾 ため池等整備事業



写真5 杵築市山香町大字向野 ため池等整備事業（大ヶ倉）土取予定地



写真6 杵築市山香町大字向野 ため池等整備事業（大ヶ倉）土取予定地

安岐町朝来所在の六面石幢の調査

所在地：国東市安岐町大字朝来

調査期日：平成19年1月5日

中山間地総合整備事業関連工事区内に六面石幢が所在し、工事に伴い移設されることが確認されたため、事前に現状調査を実施した。

六面石幢は宝立山報恩時の参道入り口から行幸道に沿って約170m南に位置する。現状では、台座と竿が原位置に残り、笠や仏龕は至近地に移動していた。

移設・復元された石幢は宝珠・笠・仏龕・中座・竿・台座からなる。宝珠は別石の可能性ある。笠は六面をなす。仏龕は六面が区画され、六体の尊仏を浮彫で現している。中座は線刻で蓮弁を表現している。竿は六角竿柱である。台座は中央部が竿に応じて六角形に彫り込まれ、外形も六角形を呈する。

全長約1.6m程で石材は凝灰岩である。石幢の時期は形態等から室町期に属すると考えられる。近接する報恩寺には「干時應永廿五龍集戊辰三月二日」の銘文をもつ石殿をはじめ、無縫塔、五輪塔など南北朝から室町期に造立された石塔類があり、六面石幢もこの時期の造塔活動の一つと思われる。

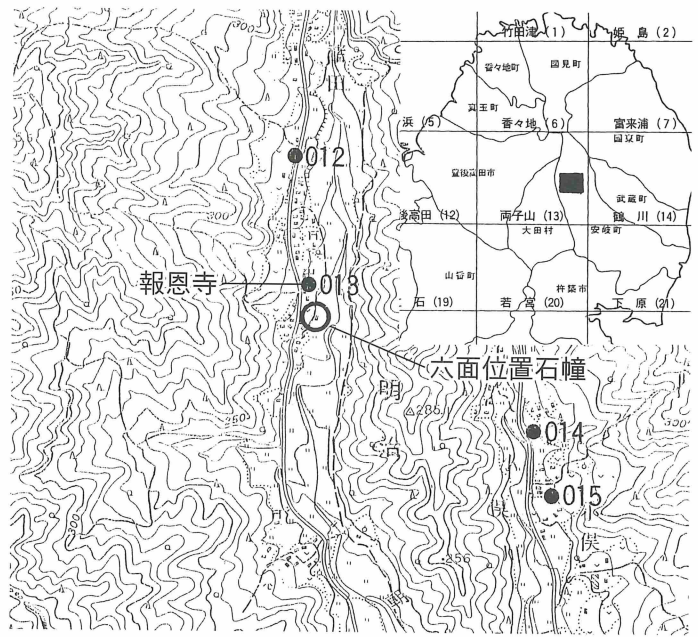


図1 位置図(1) (1/25,000)

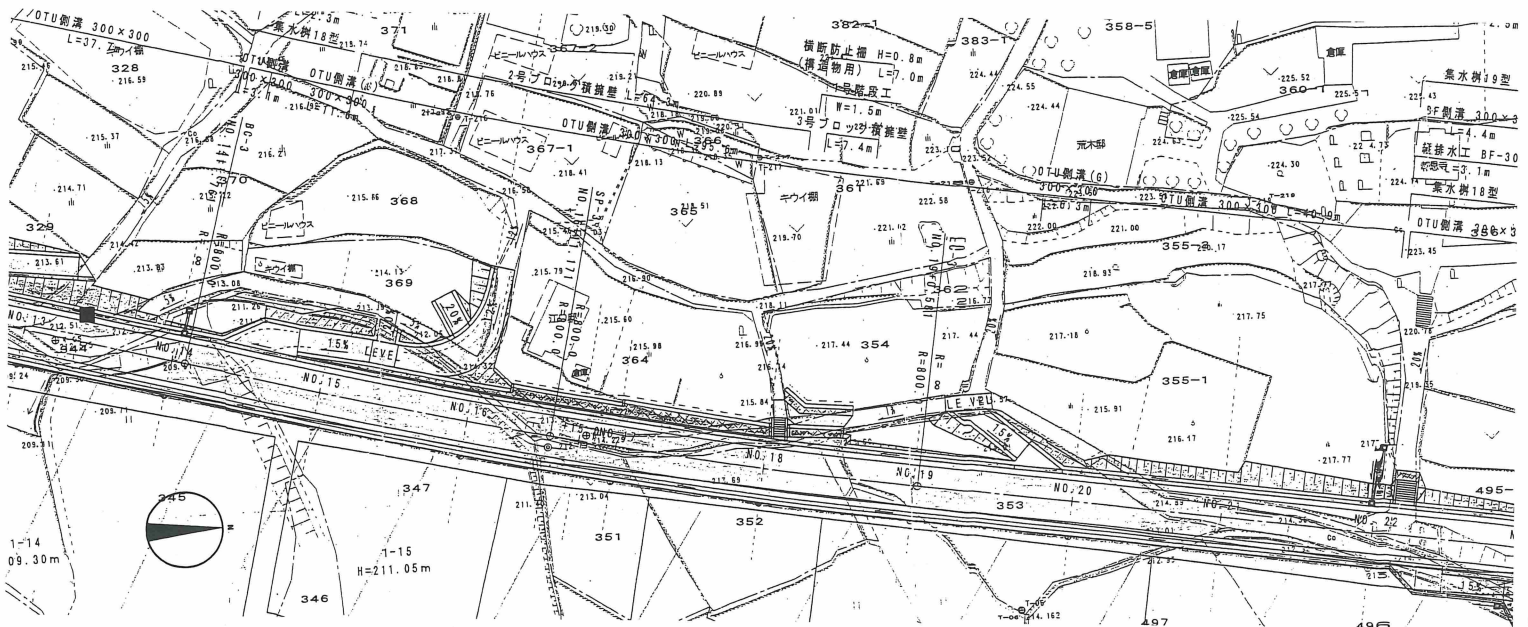


図2 位置図(2) (1/1,000)



写真7 六面石幢全景（南東方向から）

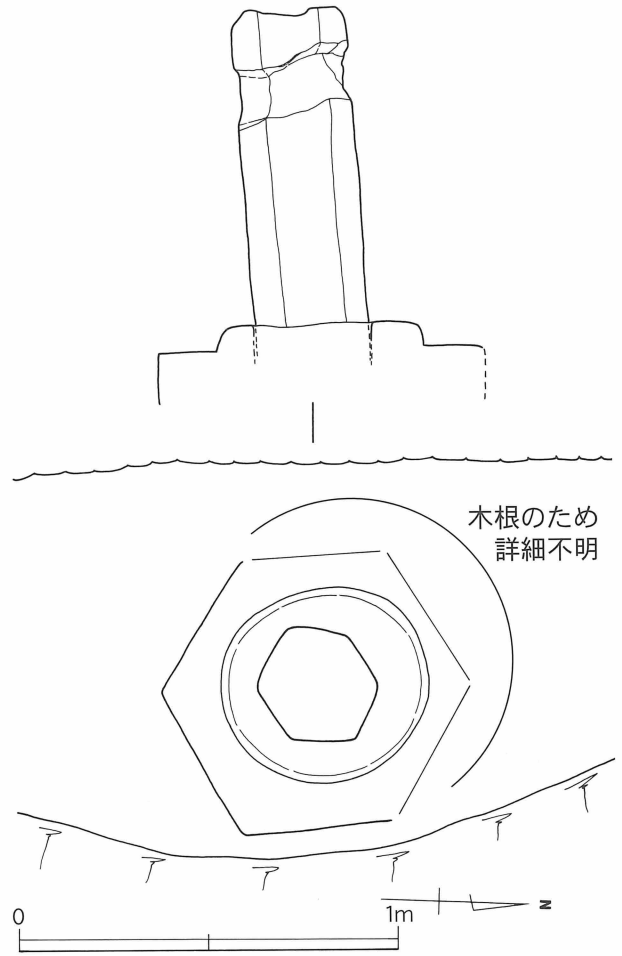


図3 六面石幢実測図（S=1/60）



写真8 同 近景



写真9 移設後の全景

Ⅱ 公立施設関係遺跡分布調査

No.	遺跡名		所在地	宇佐市南宇佐 1544-2
調査原因	宇佐県立宇佐高等学校管理棟・教室棟他建設工事		調査期間	平成18年4月27日
調査機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター		調査担当者	小林昭彦・甲斐寿義
調査面積	約200m ²	時期	遺物の保管	

発掘調査の概要

調査対象地は宇佐市南部の低平な丘陵上に位置する。周知遺跡に隣接し、分布調査の際にも遺物の撒布が認められたため試掘調査が必要となった。

調査は、平成18年4月27日に実施した。調査対象地内に4本のトレンチを設定し、バックホウで表土から1.5m下まで掘り下げ埋蔵文化財の有無・状態の確認を試みた。

調査の結果、調査対象地は学校建設の際にすでに地山まで削平されており、若干のピットは確認できたものの遺跡としてのまとまりは認められなかった。



写真10 試掘状況



図4 位置図 (1/25,000)



写真11 トレンチ内の攪乱層の堆積状況

Ⅲ 西南戦争戦跡分布調査

西南戦争は1877（明治10）年2月から9月まで、熊本・宮崎・鹿児島・大分各県を戦場に巻き込んで行われた。

2月から4月の段階では熊本県・鹿児島市周辺だけが戦場となっていたが、5月になると大分県下も戦場となり大分市以南の地域で官軍・薩軍の戦闘が繰り広げられた。薩軍が宮崎に退却した8月中旬になって県下の戦闘は止んだが、5月から8月までの約三ヶ月間に両軍によって造られた台場の跡が佐伯市の旧宇目町・旧直川村・旧蒲江町・旧本匠村や豊後大野市三重、竹田市等には今なお多数残っている。台場跡は本事業による分布調査その他によって現時点では約750基を確認しており、まだ数百基は未確認のままになっていると思われる。本年度は佐伯市宇目の大原越へに存在する多稜堡壘群のうち、昨年度の測量で不完全であった第20号台場の測量と佐伯市宇目東部から直川の県境地帯、佐伯市宇目の赤松谷周辺の分布調査、竹田市法師山周辺分布調査を行った。特に宇目東部から直川にかけては県境から派生する多数の尾根の調査に時間を要した。

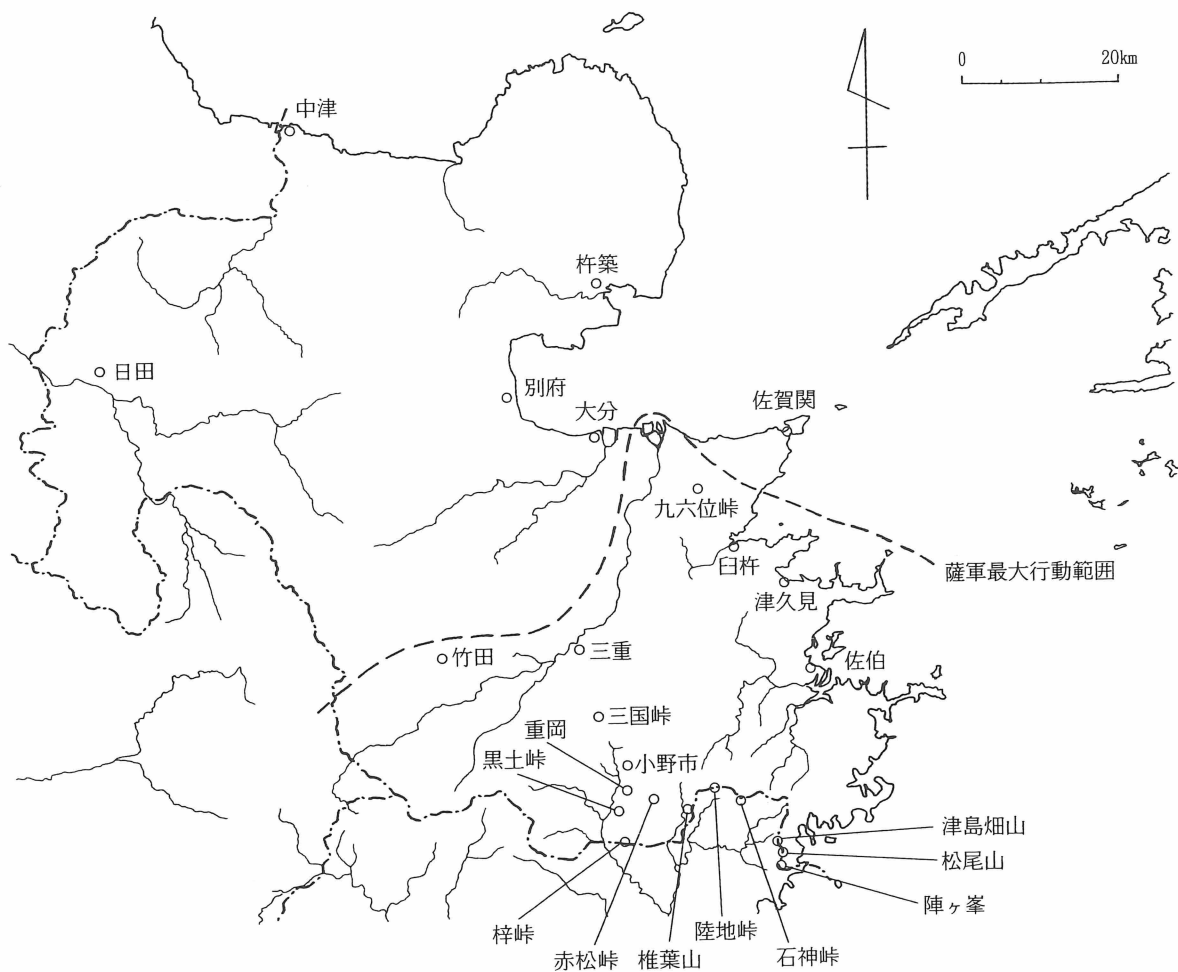


図5 西南戦争関係地図

1 測量調査

昨年度にやり残した佐伯市宇目の大原越へ第20号台場の測量を2月に行った。第20号台場は直線的な平面形をもち、北部は一部分風倒木痕のために破壊されている。本来、五角形に造られたようで、出入口は北部にあり、その東部は土塁状になっている。出入口の反対側は土盛りがあったのか、なかったのか判然としない。現状ではこの尾根線を歩く人は出入口部から内部に入って、反対側の土盛りがないように見える部分を通って出て行くようになっている。ただし、これが人工的な台場だと気づかずに通り過ぎる人も多いだろう。これが位置する地点は尾根線が屈折する場所にあたるとともに、宮崎県側に向かっても尾根筋が延びている。

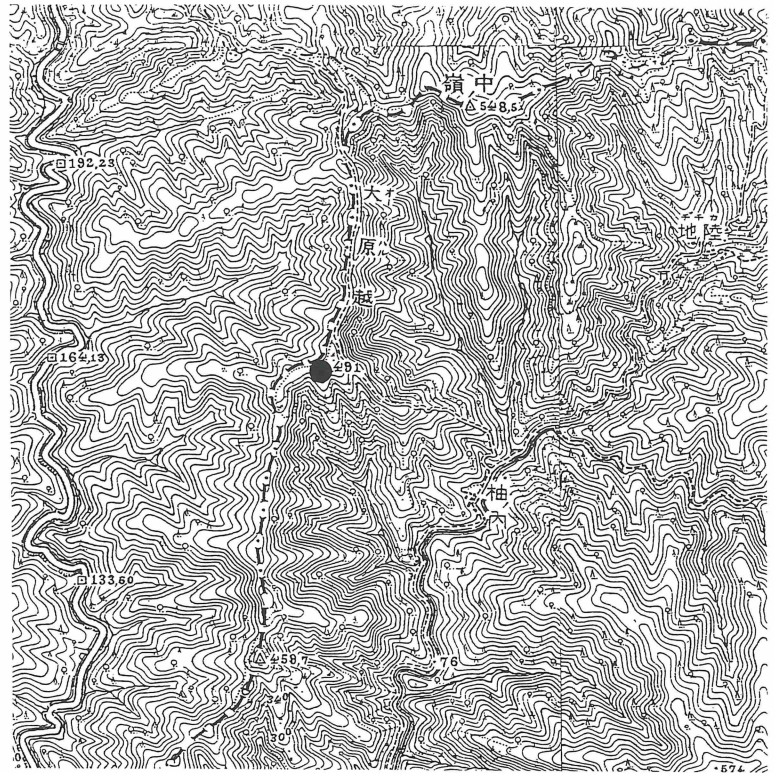


図6 位置図 (1/50,000)

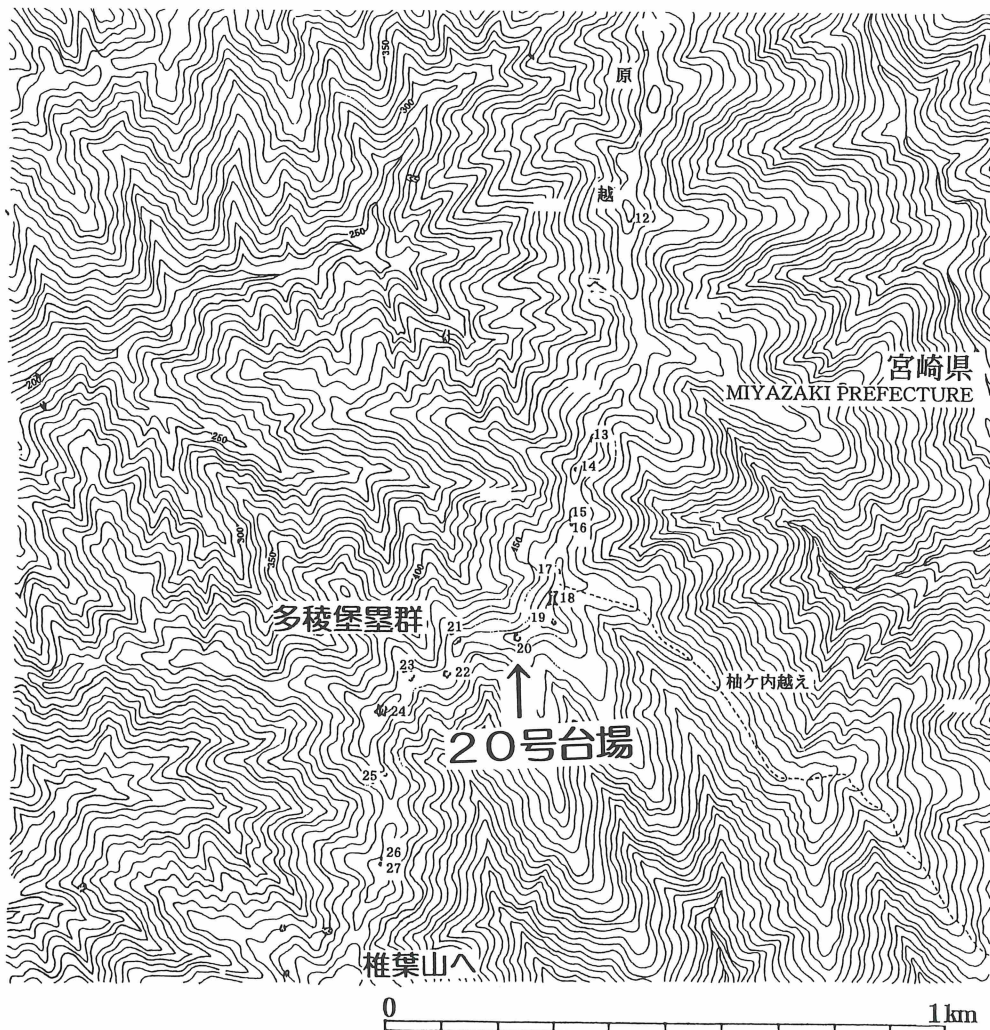


図7 大原越へ多稜堡壘群分布図



写真12 第20号台場近景（南西から）



写真13 第18号台場近景（南西から）



写真14 大原越への旧道



写真15 第18号台場(南から)

2 分布調査

この事業による昨年度までの西南戦跡分布調査は以下のとおりである。

一年目は大分市と臼杵市の境界にある九六位峠、三重町三国峠付近、佐伯市直川の石神峠から場照山まで、蒲江の対馬畑山・松尾山・陣ヶ峰を含む県境尾根、佐伯市宇目の城之越北側の尾根、佐伯市直川の陸地峠東部、二年目は竹田市法師山、佐伯市宇目の重岡西部周辺（重岡中学校西側から駒鳴峠一帯、榎峠南東側）、宇目の県境大原越へ、大原越へから陸地峠までの県境尾根線を踏査し多数の台場跡を確認した。二年目には注目すべき遺構を見つけた。それは大原越へにおいて確認した西洋式築城術の影響を示す多稜堡壘群であり、ここだけは引き続き一部の測量調査を行った。

以上の大部分は宮崎県境の尾根線である。大分県内に派生する尾根線にも戦跡が存在すると考えられるので、昨年度から佐伯市宇目東部から直川にかけての県境尾根の北側一帯、宇目の赤松峠南側尾根で分布調査を実施した。前者の状況については直川村教育委員会が1993年発行した「西南の役と直川村」において両軍配置図の略図（第37図）が示されている程度であり、具体的な台場分布状態は不明であった。昨年度末だったので、「概報9」に載せる時間的余裕がなかったがこの分布調査で県境尾根線の踏査を行い、陸地峠から西側で約50基の台場を確認している。今年度の前半には陸地峠周辺の県境尾根線から北方に伸びるいくつもの尾根線の分布調査を、西部の尾根から東部に向かって一筋ずつ風潰しに歩いて調査した。それらの尾根に台場があるという記録類は一切存在しない。これまでの分布調査の経験から手当たり次第に尾根筋を踏査してみたわけである。

また、竹田市において鬼ヶ城・法師山周辺の分布調査を行った。豊後水道沿岸部でも佐伯市蒲江の明石峠南方の未踏査であった県境尾根を踏査した。

分布調査では台場の確認に重点を置いていることと、時間的余裕がないために、縄張り図のような略図を作成した台場は少ない。略図は最終年度に報告したい。

1. 佐伯市宇目大原越へ北部（県境から大原への大分県内尾根）

国道10号の大原集落から南東方向に延びる尾根を縫うように、直線距離を計って約3.5kmで宮崎県境に至る路線がある。この一部に台場が分布している。

現道は大原から尾根の西側の谷沿いに進むが、第9図の範囲では旧道は尾根線を通ったらしい。集落から国交省大原無線中継所までは今も山道として利用されている。そこから300mほど進むと尾根が西側に分岐しているが、この西側に突き出た尾根の峠（尾根の峠部分）と先端には旧道がある。

元の尾根に戻り南東に行くと、中継所から直線距離約600mの位置に最初の台場が現れる。ここから250mの間に計6基の台場が分布する。標高は390mから400mである。どれも宮崎県側を向いて造られている。比較的小型の半円形台場群だが、一番東側の台場だけは三箇所まで屈折している。この南東側まで現在林道が建設されているが、この先は旧道がよく残っているものの現在ほとんど利用されずシダに覆い隠された状態である。

大原越への旧道は尾根の北側斜面を通る部分から残っており、次に100m弱の峠部分では旧道が中心を土塁のように貫き、やがて次の峰の南斜面を迂回して進む。旧道は急に上りになったり、逆に下がったりすることはなく、ひたすら緩やかに高度を増すだけである。県境に到達する最後の300m強の路線も尾根の西側斜面を通る。この部分は谷筋では途切れているが、よく残っている。幅1m程度の道路の中央に直径60cmくらいの松が生えていて、長い間牛や馬が通らなかつた証となっている。台場は旧道から見上げる尾根線上にある。県境から西北150mほどの尾根線上の位置に1基、逆「J」字形の台場が北東斜面から西北を向いて造られている。土塁上が通路になっているが、西部の雑木林の中に内側の窪地が残っている。少し南側に半円形の台場が北西を向いて存在する。

大原越へ大分県側尾根北部に存在する台場群と南部にある2基の台場とは直線距離で800mほど離れて存在し、向かい合う形で分布している。この地域では官軍と薩軍とが対峙していたと記録にあるので、前者は官軍、後者は薩軍のものであろう。斜面の下方、旧道が尾根の位置で屈曲する地点にも台場1基がある。

また、大原越へ北部から西方に延びる尾根を踏査し9基の台場を確認した。付図の分布図には掲載している。

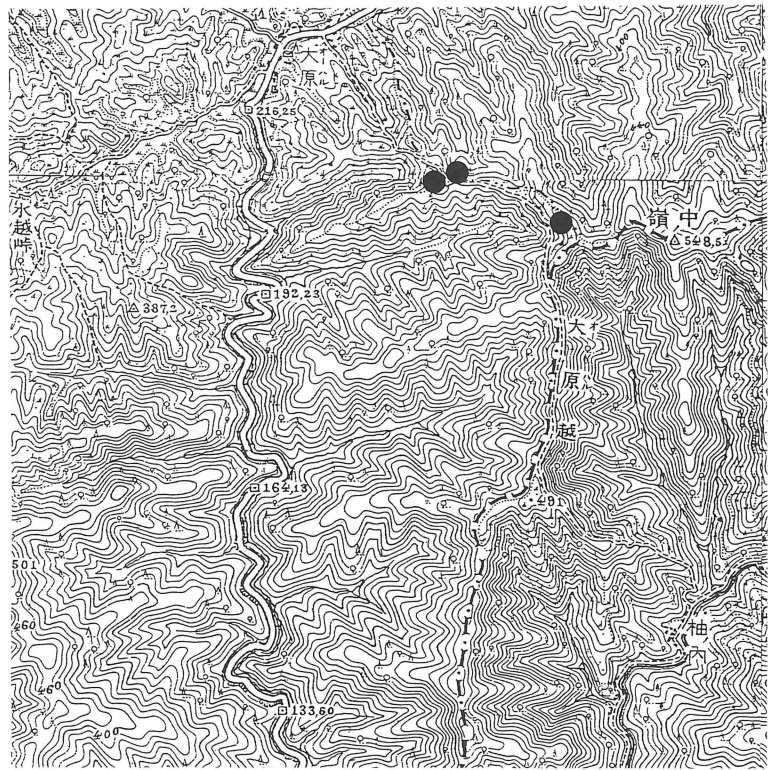


図8 位置図 (1/50,000)



写真16 豆殻峠北部から中ノ嶺を見る

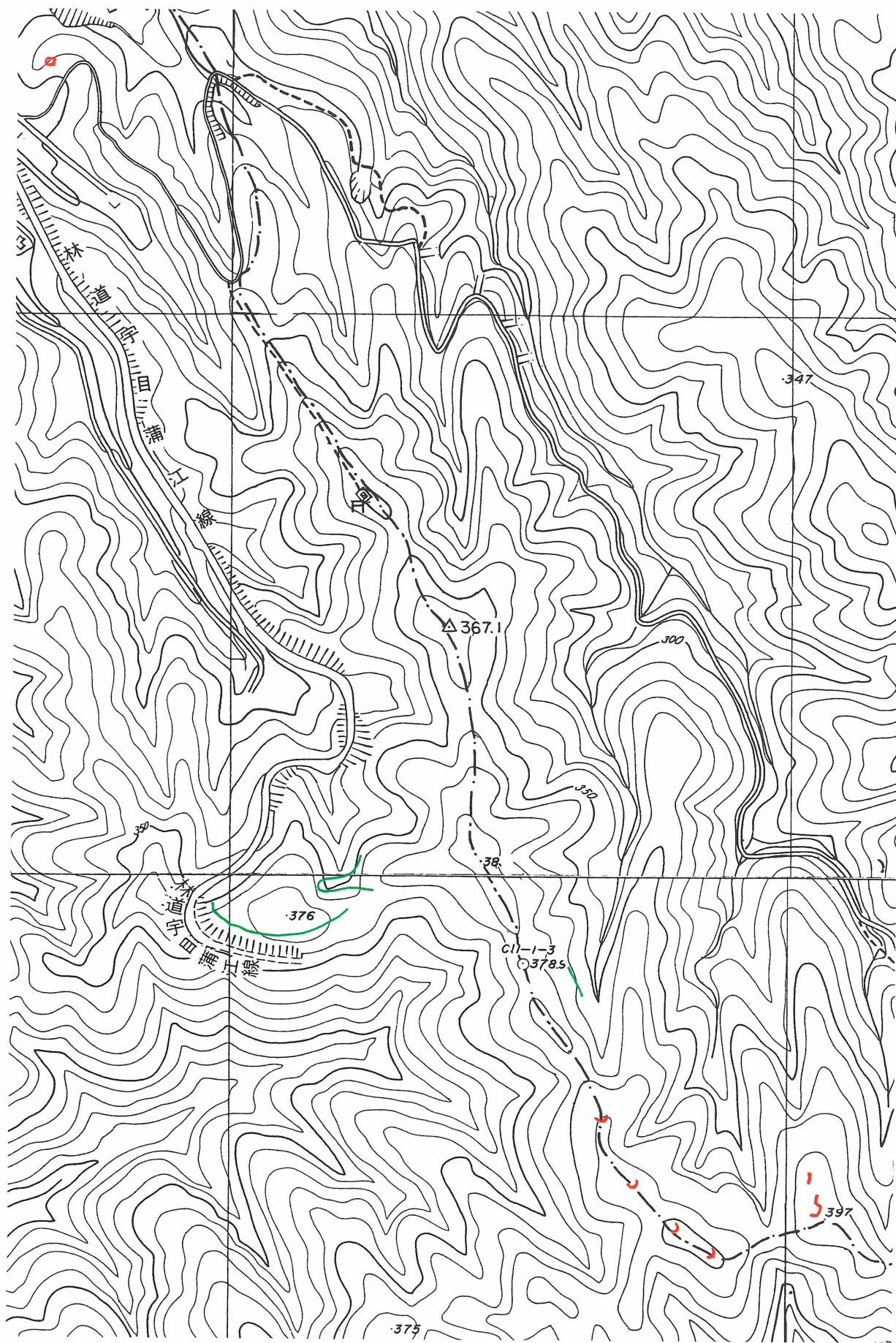


図9 大原越へ大分県内尾根の台場・旧道分布図 (1/5,000)

2. 佐伯市直川（県境から内水に至る尾根）

前述の大原越へ大分県内尾根の東側に位置し、南部の標高440m付近で合流する尾根である。この尾根には三箇所にて5基の台場が分布している。

踏査で見つけた順番に南から順に説明する。南部の台場はこの尾根の南端部にあり、標高450m等高線で囲まれた部分に位置する。3基の半円形台場が一直線に結合した形をしており、主に南東から東側に敵の位置を想定して作ったようである。前述の県境近くにある2基の薩軍台場からは300m位の距離があり、直接見ることができる。尾根西側から攻撃される恐れがありそうだが、背後には前述の大原越へ大分県内尾根があると認識していたようである。

尾根は3基がある場所から北北西に低くなりながら延びていて、約150m行った場所（やや上面は広い）にも台場が尾根線を遮断する

ように広がっている。ここからは樹木がなければ前述の薩軍台場を見通すことができる筈だし、それらの東側に続く県境尾根は真向かいに見える。

台場から北に向かい、約300m行ったところにある二つ目の少し高い頂上にも台場がある。内側の窪みはほとんどなく平坦で、幅広い感じを与える台場である。この北側に続く尾根線は300mほど踏査したが台場はなかった。

先程の台場の位置からは別に北西方向に支尾根が出、最後の台場と大原越へ尾根の間を遮っているが、この尾根線には何もない。

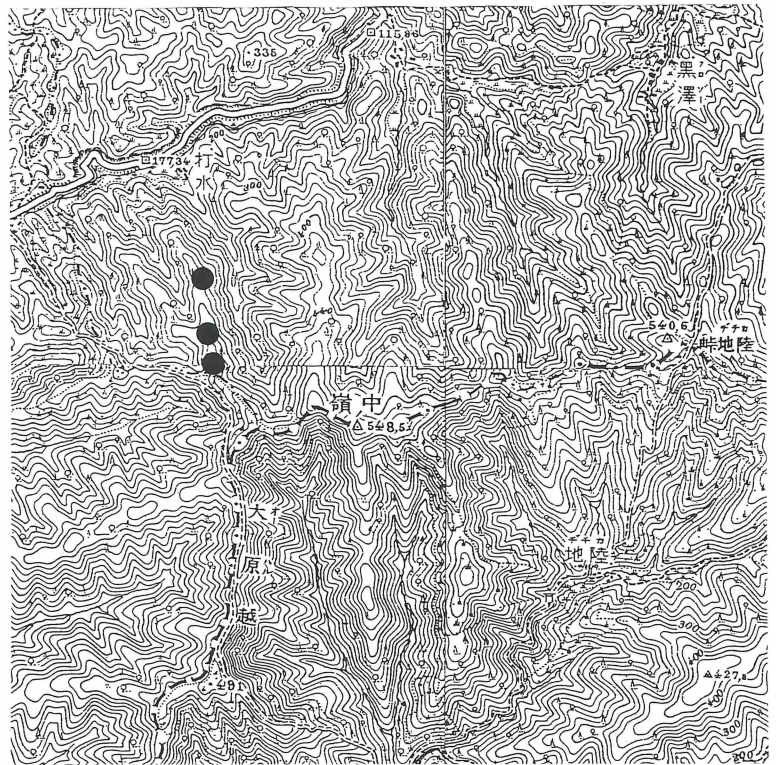


図10 位置図 (1/50,000)



写真17 中ノ嶺から内水に至る尾根から西方にある尾根を見る



写真18 大原越へ尾根から内水口尾根(左端)・旗山口尾根を見る

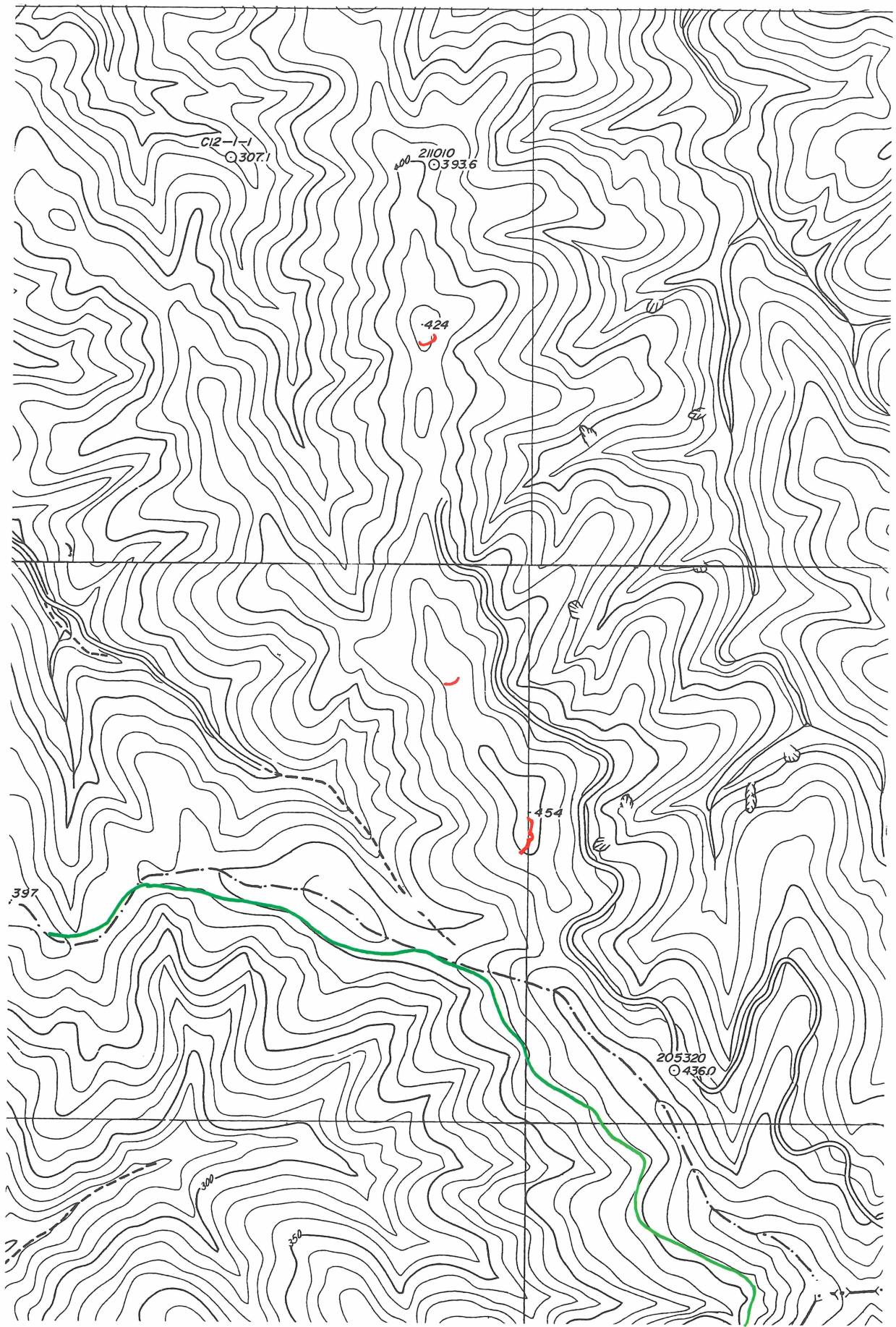


図11 県境から内水に至る尾根の台場分布図 (1/5,000)

3. 佐伯市直川（中ノ嶺西方から内水に至る尾根）

県境には中ノ嶺（標高545m）という三角点をもつ峰がある。頂上から300m西側にある相対的に低い山名不詳の峰からは大分県側である北方向に約1200m直線的な尾根線が延び降っている。この尾根に6基の台場が残る。そこから先は枝分かれして北西に行けば内水集落、北東に行けば杭の内集落に達する。

南から説明する。中ノ嶺西方にある山名不詳の峰が急激に北側に落ちる手前に北側を向いた台場がある。北の大分県側から真っ直ぐ県境に繋がる場所を押さえる標高500mの位置にあり、半円形の台場である。尾根線をたどって北方から登り着いた敵を南側の高所で待ちかまえるように設けられている。

その先、北方の方は頂上の狭い尾根を約600m緩やかに降って行った所に北側を向いた台場2がある。この位置では西側に短い尾根が分岐しており、分岐点を選んで造ったらしい。

ここから北は300m弱の間ほぼ水平の尾根線だが、比高差20m程度で東西方向に続く峰にぶつかる。頂上には3基の台場が東西方向に並んで南を向いて存在する。頂上の台場が最も大きく、内部に三角点がある。これらは県境から約1000m離れた場所に位置する。

東西尾根は台場の西に下がって続くが、頂上から250m先までみた範囲には他に台場はない。

台場の背後付近には北側に下がる尾根線が延びており、約200m先の周囲が平坦になった場所に北東を向いた小型の台場がある。台場を取り巻くように林道が走っている。この先約100mを調べたが何もなかった。

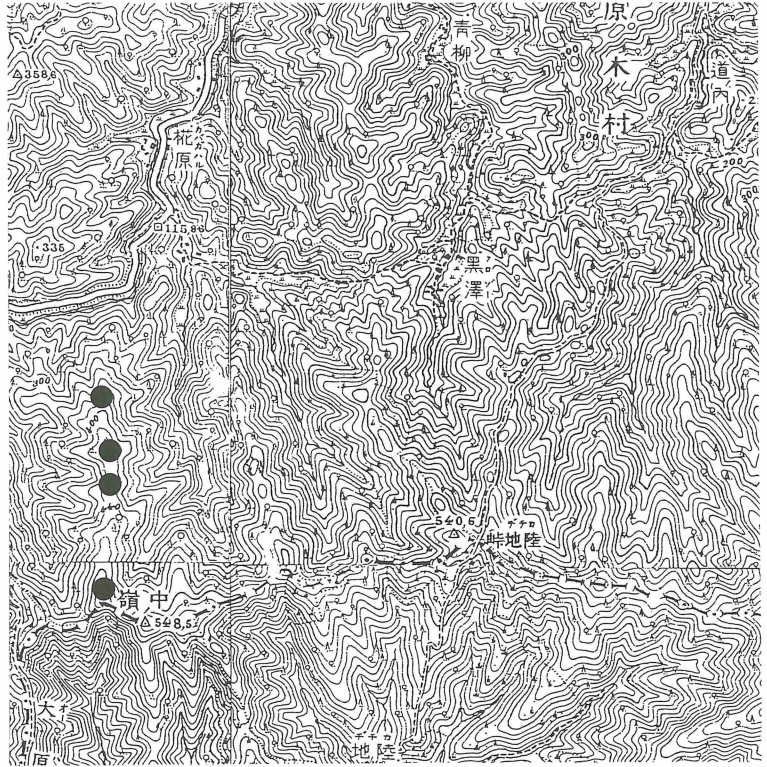


図12 位置図 (1/50,000)



写真19 中ノ嶺西方から大分側を見る

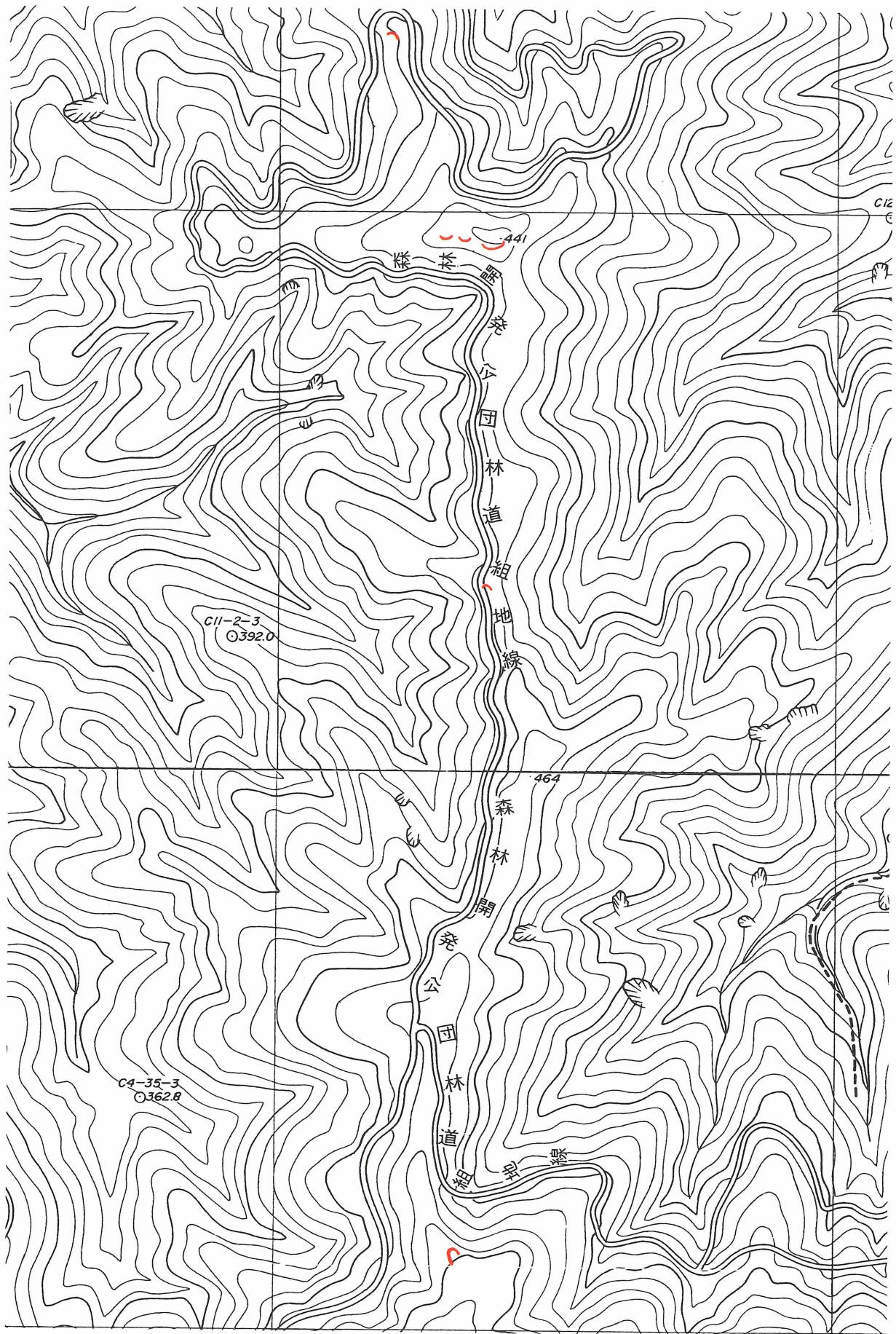


図13 中ノ嶺西山一旗山？ーから内水に至る尾根の台場分布図 (1/5,000)

4. 佐伯市直川（中ノ嶺東方から杭の内に至る尾根）

中ノ嶺から東方へ県境尾根を1000m進んだ地点は北側の大方県側に尾根が突出し、標高510mの等高線が廻る。ここから北北西方向に2km強の長さの尾根筋が続く。この尾根をゆけば旧直川村杭の内に達する。

踏査は林道の行き止まり周辺、標高330m付近から南に向かって行った。第15図左上に示す林道は何カ所かの大きな土砂崩れのため車での通行は不可能であり、今後も雨が降れば人工的に削られた崖を流れる水の影響で杉林はもっと崩落したり倒れたりすることは容易に想像できた。図左外の林道の分岐点から歩いて尾根の北端まで行き、そこから南側の尾根線に上がり踏査した。三箇所に分かれて台場を確認した。

北端の台場は林道に三方を囲まれた場所であり、比較的なだらかな斜面の途中にある。半円形の土塁が東を向いており、内側は窪む。ここから南に400mほど上面の細い尾根を進むとやや平坦な場所となる。平坦面の北端部に南を向いた半円形の台場がある。

土塁の長さは東西に8m。そこからほぼ同じ高さで続く細い尾根線を行くと、少しずつ高くなり、途中に次の台場がある。直角に折れ曲がった形で、長さ6m。尾根線の上方ではなく、見通しの効く南東方向を向いている。

少し登るとまた台場がある。先程の台場と同じ方向で東側だけ短く屈折している。長さ5m。すぐ南にも台場がある。この付近は小さな頂上になっていて、土塁部は東から南に

廻り、西部にも僅かに残る。全体は「U」字形で、南北8m、東西6m程度である。西以外は土塁の残り具合がよい。これら4基の台場は長さ約100mの間に分布する。

台場が4基続いた尾根の南は降り斜面となり、そこから再び上って行くと1100mで旗返山（という名であろう山の）頂上に着く。旗返山には南北に二つの峰があり、それぞれ2基の台場があり、中間にも1基ある。北端の台場は北側峰の北部に位置する「J」字形台場で長さ6m、尾根線北方を意識して造られている。背後に窪地を併せもつ。次にある2基の台場は西側の谷を向く。その北側のは痕跡的な残り具合である。南側のは長さ5m、尾根上から少しだけ斜面にかかる部分に造られている。

この尾根に分布する台場群は中央部の3基は官軍、南部の台場群は薩軍が造ったものであろう。北端の台場の帰属は不詳だが、おそらく南方の官軍台場群とさらに北方の官軍本営との連絡路の脇に設置したものであろう。

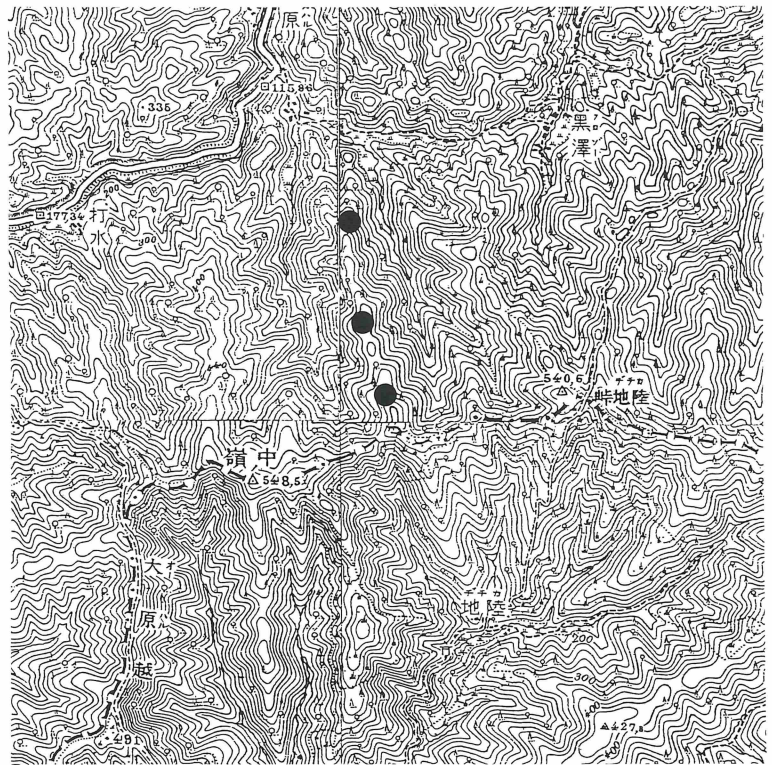


図14 位置図 (1/50,000)



写真20 北から見た台場5

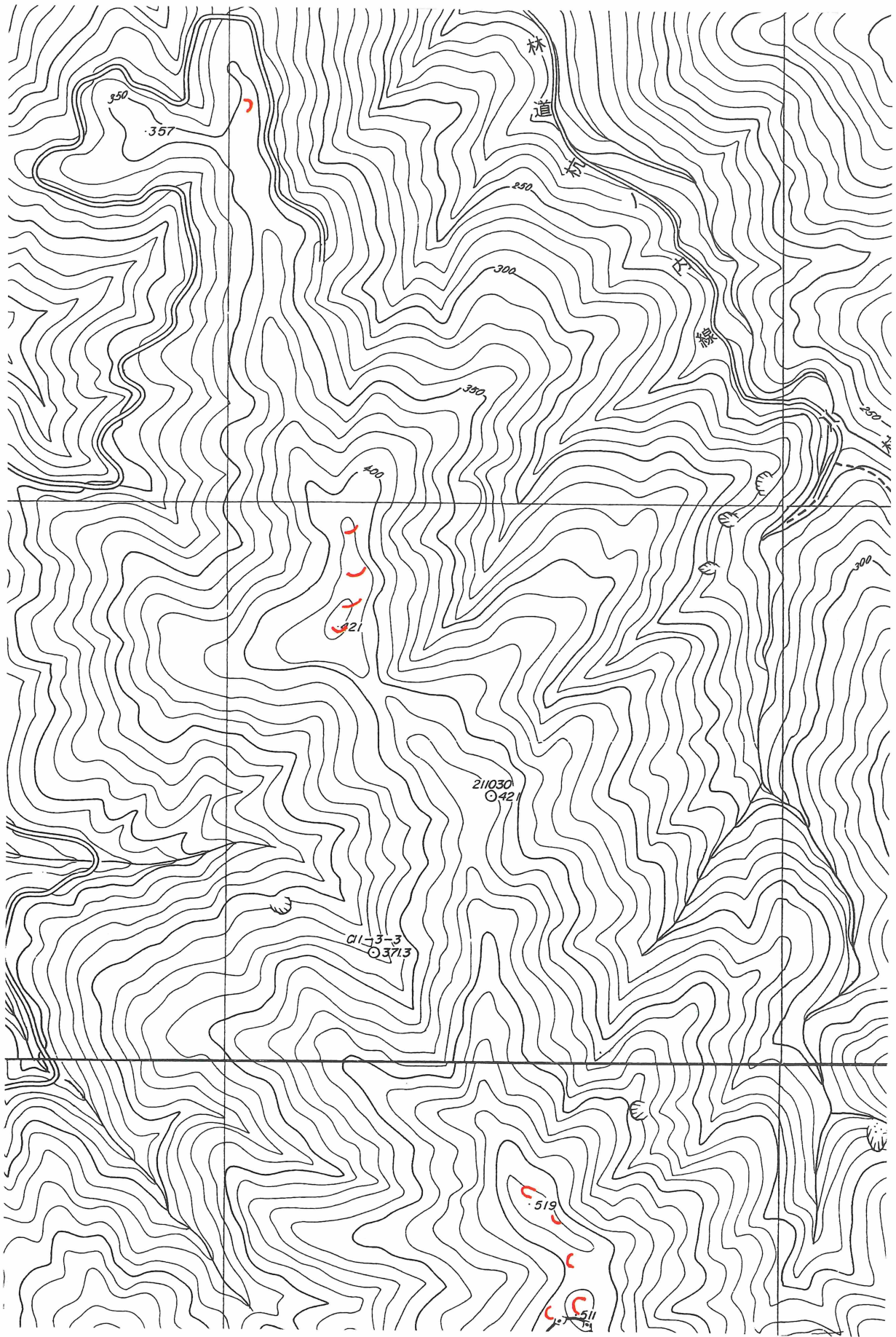


図15 中ノ嶺東方から杭の内に至る台場分布図 (1/5,000)

5. 佐伯市直川（一ツ戸から杭の内に至る尾根）

陸地峠北西側の峰には1/5,000図上には一ツ戸（標高540.6mの三角点がある）という名が与えられていて、ここから北西方向に尾根が延びている。三角点から1100mまでの範囲を踏査した結果、頂上を除いて14基の台場を確認した。

県境の峰である一ツ戸については別に説明することにし、ここでは大分県内に延びた尾根筋の台場について述べる。

三角点から比高差40mほど下がると水平な細尾根になる。その南端に北西尾根筋の延長方向を向いて小型の台場が存在する。100m弱前方、つまり北側は20mほど高い峰となり、頂上の北半分には半円形に削られてできた窪地がある。窪みの北部は峰の北斜面になっており、内側から背後は道路状に窪む。これらを人工的な台場の痕跡と考え台場とする。ただし、土塁状の盛り土は認められない。北西に下りきると水平尾根となりやがて少し高まり、行き着いた頂上の端部に台場が現れる。これは半円形土塁が三つ複合した形で、大きい方の台場は相対的に低く、北側の台場が一段高くなっている。中央部分の台場はほとんど円形で頂上部をなし、北側一箇所だけが開いている（第17図）。背後、つまり北側斜面には休憩用の平坦面を削り出している。この位置から北東側に少し上面の平たい尾根が延び、半円形台場2基がある。

北西側にも尾根が続くので600mほど進んだところ、台場を8基を確認した。ほとんどは尾根の南西を向いて存在し、1基だけが尾根長軸上だが斜面の途中に造られ、尾根の先方を向いている。他の6基はすべて南西を向いている。

最北端の台場の先、170mほどにある尾根の末端まで調べたが台場はなかった。

この尾根に分布する台場の帰属については、北方を向いて造られた台場3基は薩軍の可能性があり、南側の県境や西南を向いた台場は官軍のものであろう。南端部では両軍台場がかなり接近して造られていたことになる。

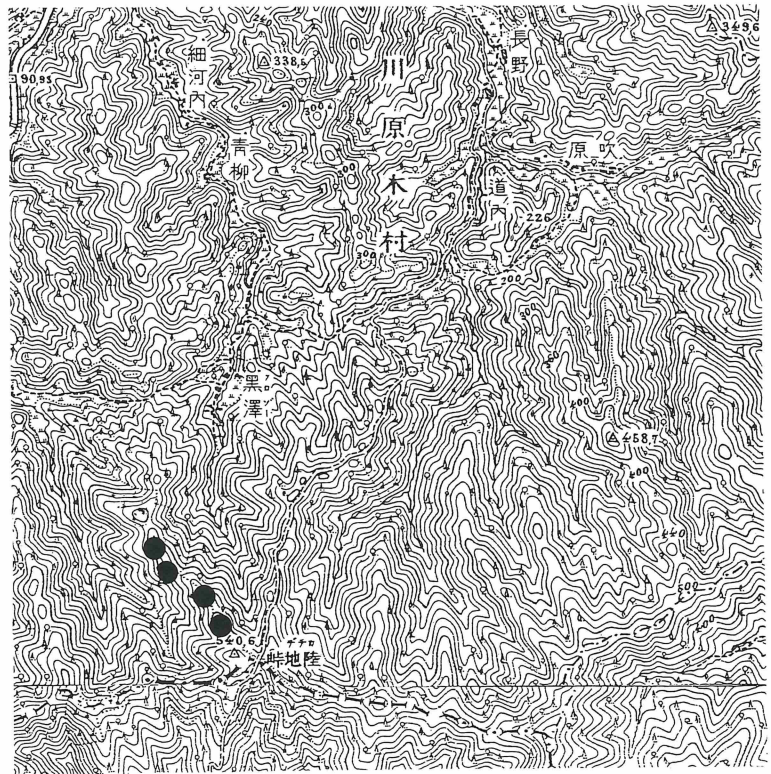


図16 位置図 (1/50,000)

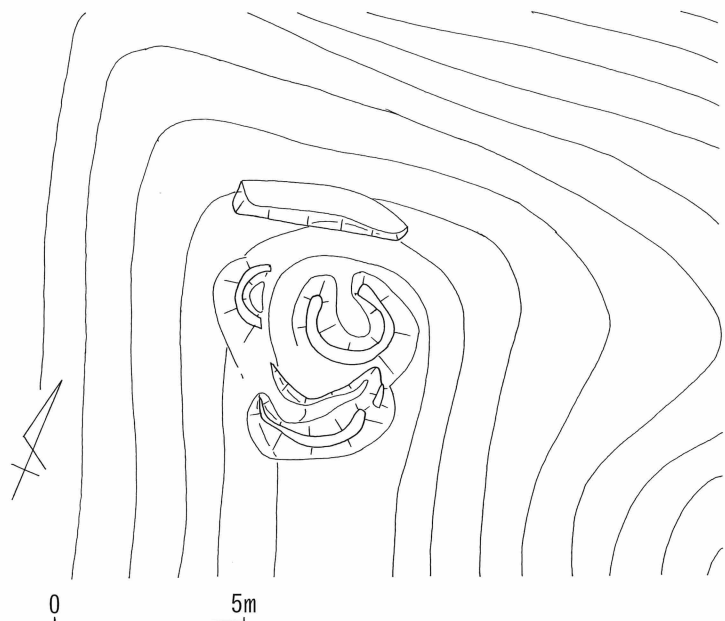


図17 一ツ戸から杭の内に至る尾根の台場略測図



写真21 台場の現状



写真22 一ツ戸から杭の内に至る尾根の台場3

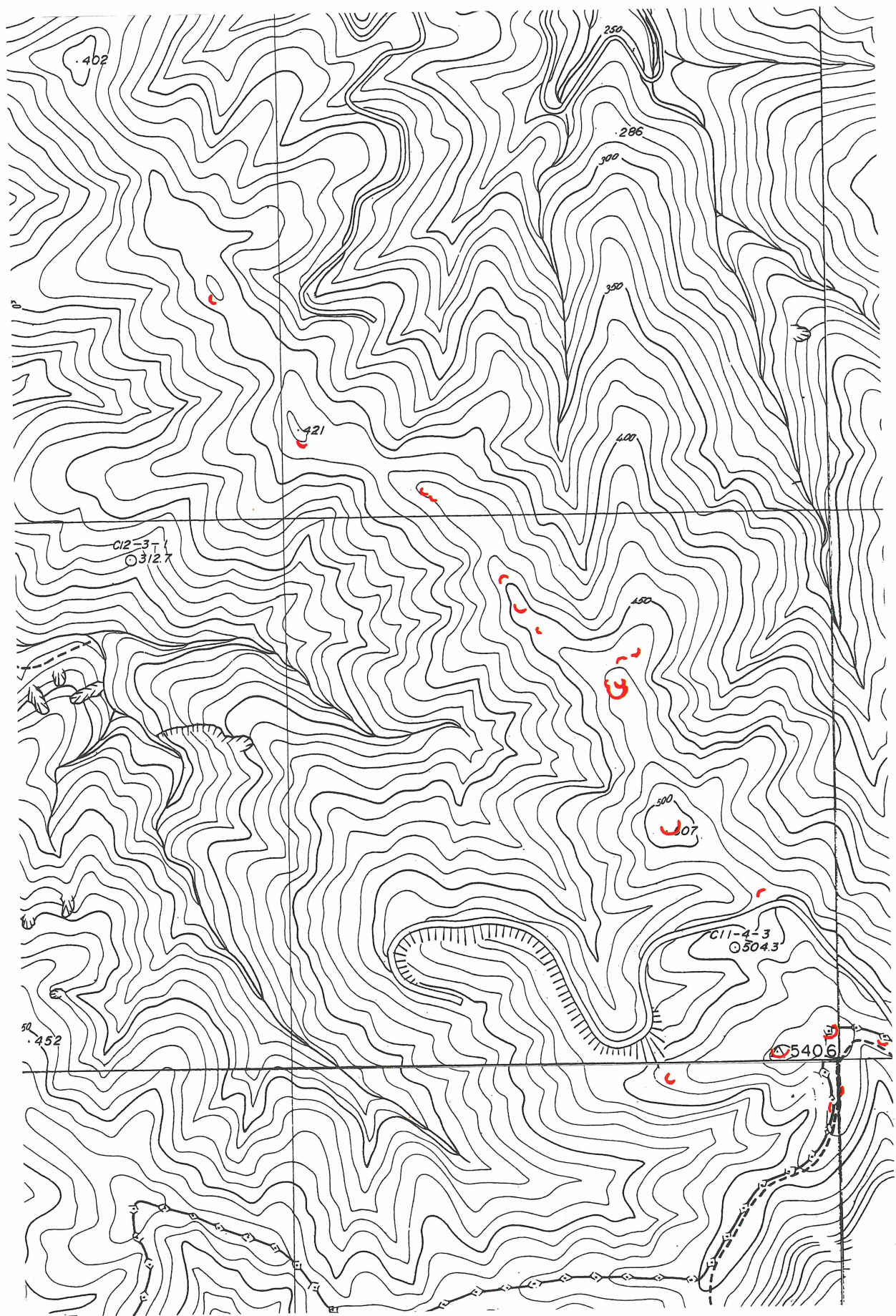


図18 一ツ戸から杭の内に至る尾根の台場分布図 (1/5,000)

6. 佐伯市直川（陸地峠から黒沢・道ノ内に至る尾根）

陸地峠は大分県と宮崎県とを結ぶ路線の県境地点にあるが、自動車が通れるようになったのは道路が整備された近年になってからのことである。現在も林業関係者や陸地峠戦跡を訪れる人以外ほとんど利用者がいないようである。

陸地峠は北西側の一ツ戸と南東側の標高540m等高線が廻る峰との中間、標高約520mの低地部、峠に位置する。古来の経路は谷沿いを峠まで上ってくる今の道路とは異なり、尾根線を利用してはいた。県境越へは最も低いこの地点を通過していた。1/5,000図に波線で示されているのがそれである。西南戦争時の激戦地として知る人ぞ知る峠であり左右の県境尾根一帯には多数の台場跡が分布し、現地には県境を挟んで北側には旧直川村教育委員会の、南側には宮崎県北川町教育委員会の史跡案内標識が立っている。

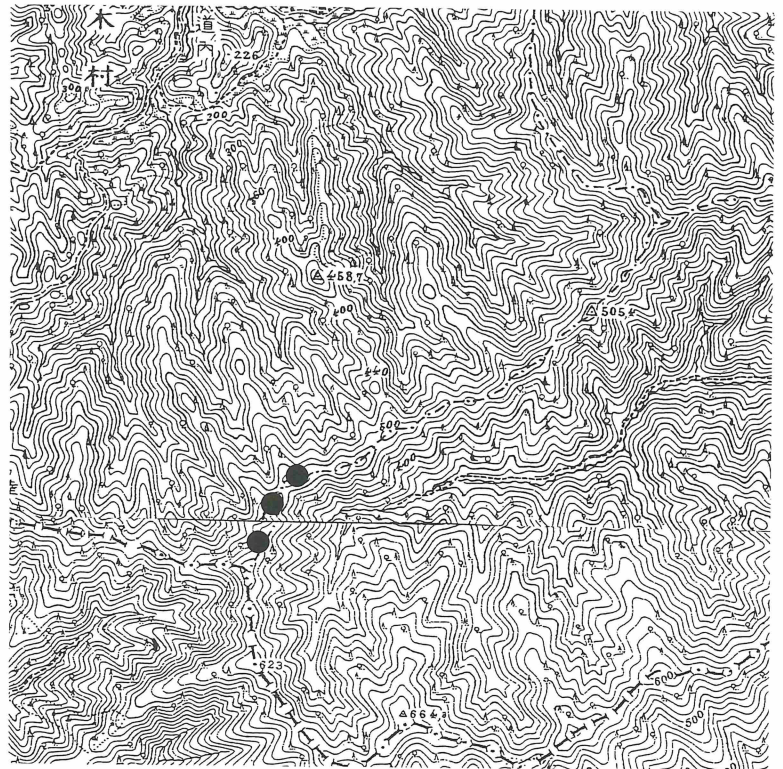


図19 位置図 (1/50,000)

踏査は陸地峠から大分県側尾根を北上することにした。峠に駐車し、北側の尾根に上ると西側斜面に廃れた旧道が走っていることが分かる。旧道は間もなく尾根を斜めに横切り、分岐する。西側のが本道であり高い場所では峰の西側を通り、低い場所では尾根線を通る。

峠から平面距離で380mの所、小さな峰の頂上南部に台場が南向きにある。長さ8mほどで内側には窪地はなく、平坦である。背後6mの斜面位置に休憩用の平坦面を削り出している。さらに80mほど先にも同様の台場があるが、この付近に多いシダに隠れて全景不詳である。ここは水平な尾根の末端に位置する。距離で約150m近い下りの後10m弱の高まりに達し、頂上に台場がある。峠から北に延びた尾根は約1000m



写真23 中央の峰に石柱がある

にある峰の位置で東北方向に「く」の字に屈折する。峰の上には南を向いた台場が2基並んでいる。この位置から北西に200m、西に100mの範囲までは踏査した。この北西側の尾根を伝っていくと黒沢地藏に出る。当時官軍が宿営していた場所であり、室町時代頃からの寺院がある。

台場は屈折点から北東に続く尾根におおついで分布する。この地域の尾根は上面がやや広い。ここから先の台場は尾根の南縁に沿って設けられ、ほとんど下方に尾根が延びる地点を選んで台場を設けている。1基だけは北側に位置する高台にあり、表土が流失し台場らしい小さい窪地が痕跡的に残る。土塁部分がないので台場であったのか、断定できない。以上屈折点から北東にある台場の立地は黒沢集落に行く方向ではないが、主な尾根線が北東に延びているので、守備線に空白を作らないためには必要だったのであろう。他の尾根に比べて台場数が多いのがこの路線の特徴である。

以上の台場群はすべて官軍が築いたと考えられる。

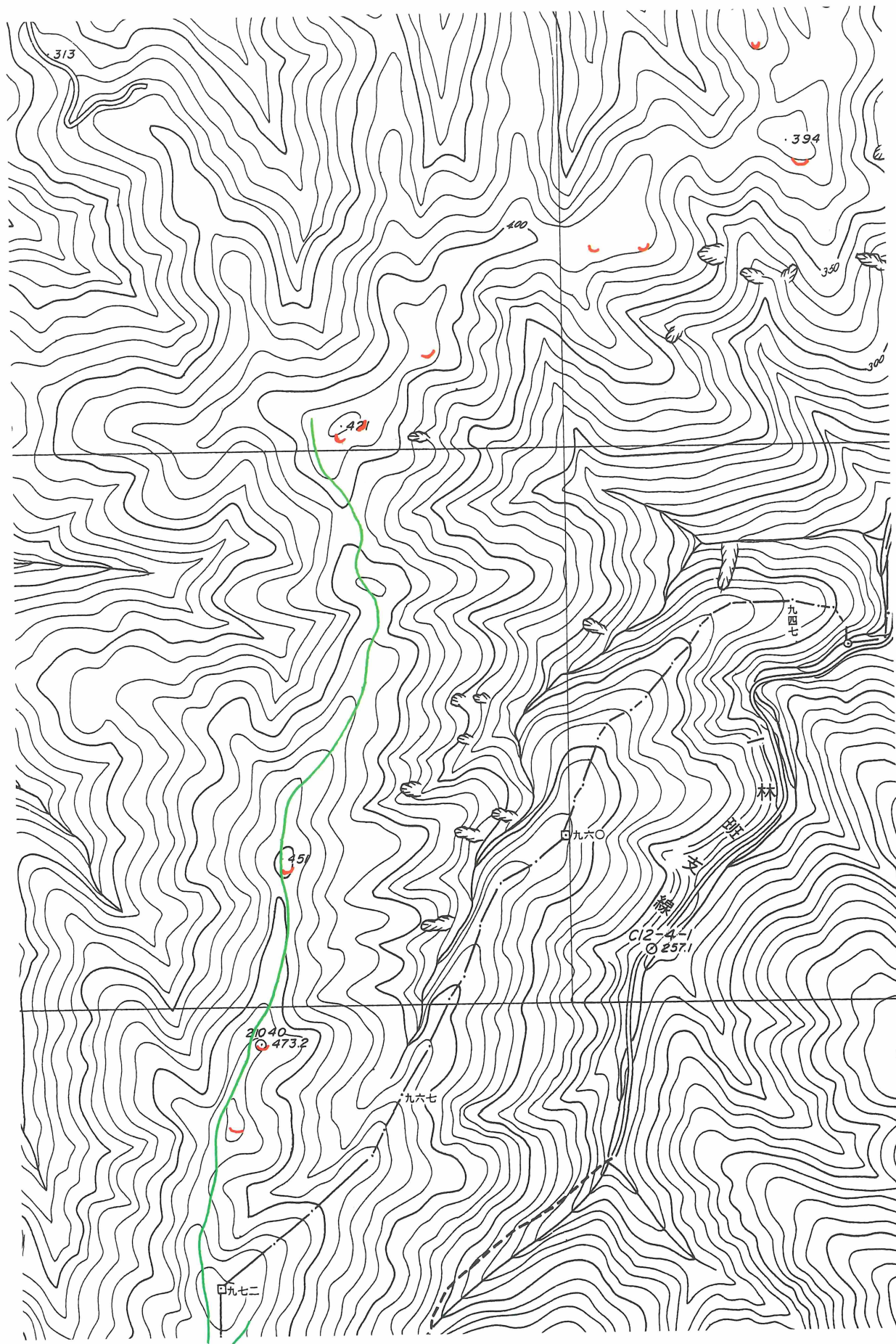


図20 陸地峠から黒沢・道ノ内に至る尾根 (1/5,000)

7. 佐伯市宇目大原越へ県境屈折点から中ノ嶺經由陸地峠

佐伯市宇目の大原から南東方向に延び県境に達する尾根を前述のように大原越北部として報告した。ここでは大原越へが県境に達した場所から東側に続く陸地峠までの県境尾根について述べる。

この尾根にはいくつもの峰が並んでいるが、国土地理院の1/25,000図には中ノ嶺（標高548.5m）と一ツ戸しか名前が付いていない。中ノ嶺の西側には510m等高線の廻る峰があり、ここから大分県内に向かって北上する尾根が下っている。仮に中ノ嶺西山と呼んでおく。

台場は西山の西側に13基、麓から頂上西部に5基、東部に1基がある。別に前述したように北側尾根線の上端に北側を向いたのが1基ある。南側の宮崎を向いたのは12基で、反対に大分県を向いたのが6基である。この地域の西端の台場は背中合わせに南北を向いており、薩軍、官軍がそれぞれ占拠していた時に必要な方向に築いたものである。次の台場は「J」字形で、内側は窪み尾根線の東側を向いている。薩軍のものか。

中ノ峰西斜面には斜面の途中に5基の台場があり、4基が大分向き、1基が宮崎向きである。中ノ峰頂上には南側を向いたやや大きな台場がある。中ノ嶺からは宮崎県方向、南に向かって急な尾根が下っている。中ノ嶺頂上から50m以上東側に西側を向いた台場20がある。

さらに中ノ嶺の東側にあつて540m等高線が廻る峰、仮に中ノ嶺東山と呼ぶ、からも宮崎県側に長い尾根が延びている。以上二本の尾根は陸地集落の西方を通り、下流の柚ヶ内集落の北側に到達する。当時も当然利用した路線であろう。東山には西向きと東向きの台場が頂上の反対側に造られている。

中ノ嶺東山を過ぎて800mほど東に行くと510m等高線が廻る峰があり、一帯はこの峰を中心に県境尾根線が北の方に押し上げられたようになっている。東山の台場から300m離れて次のが東向きに造られている。510m峰には全体で5基の台場があるが、北部の3基については既に南北尾根の部分で説明済みである。

南部の2基のうち西側の台場は頂上の西側に続く広い斜面にあつて、やや大型である。西の尾根線を警戒して造られている。次の台場は頂上にあつて西から北向きに造られている。

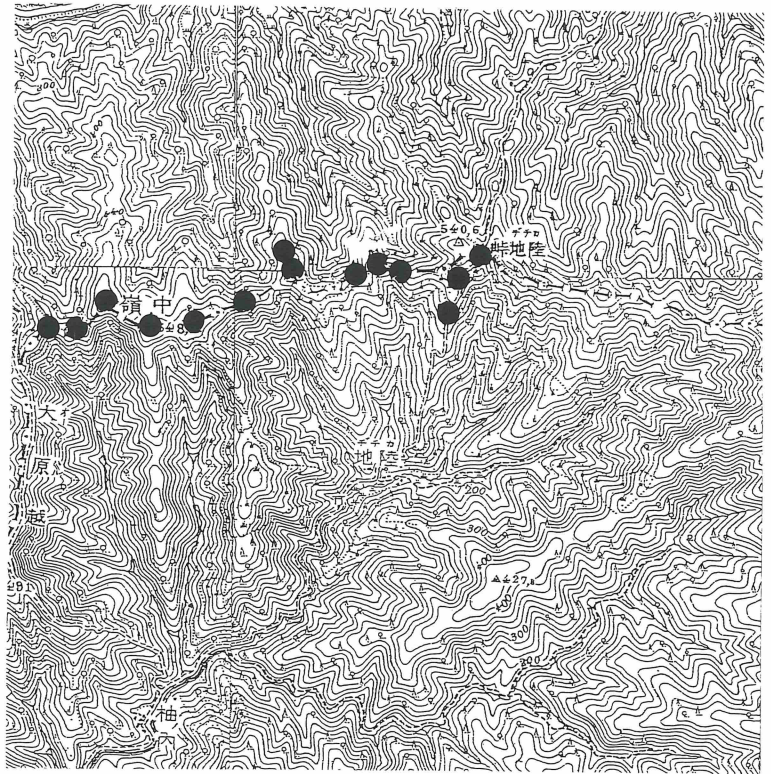


図21 位置図 (1/50,000)



写真24 西から見た中ノ嶺



写真25 中ノ嶺西方から北を見る

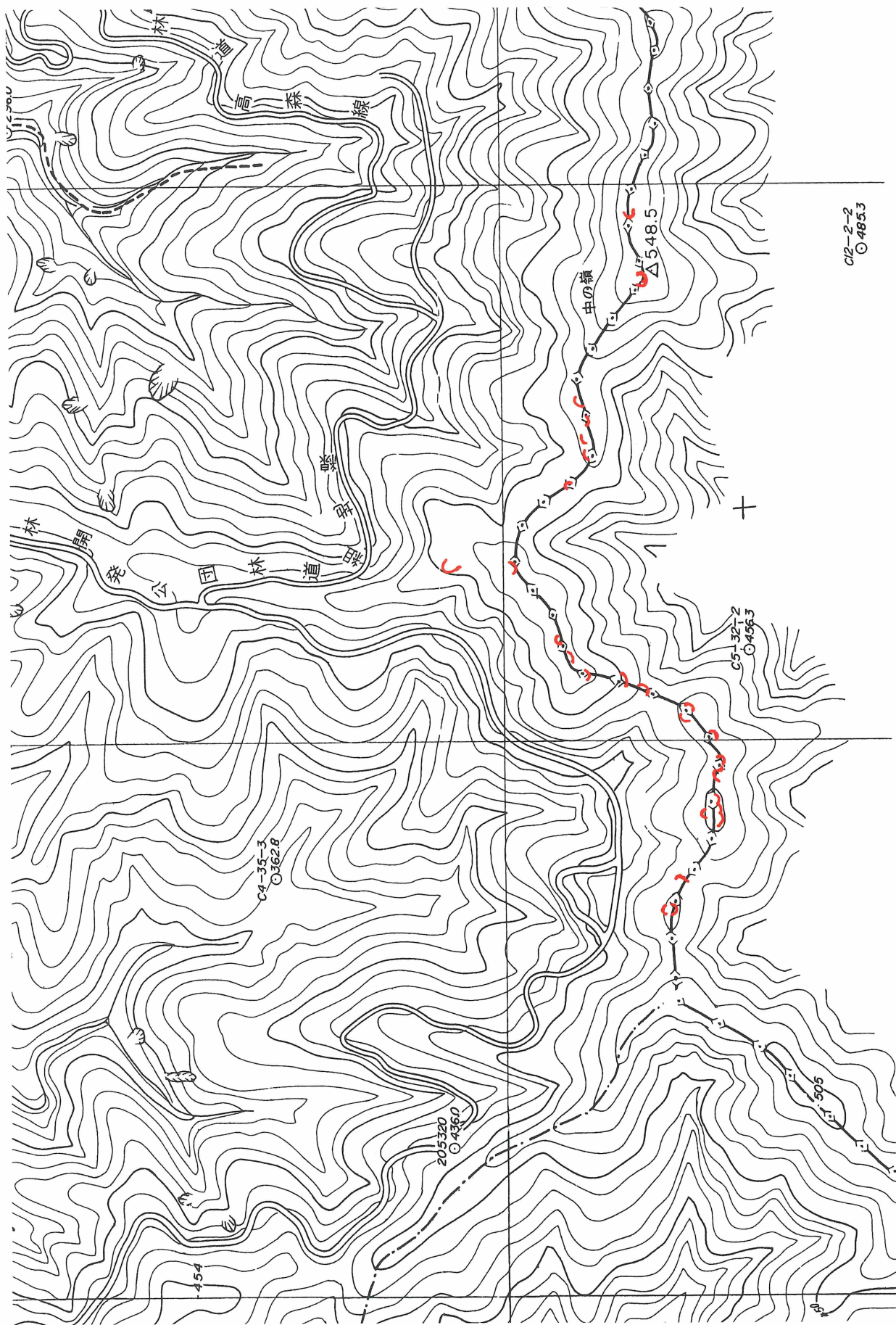


図22 大原越へ県境屈折点から中ノ嶺經由陸地峠台場分布図① (1/5,000)

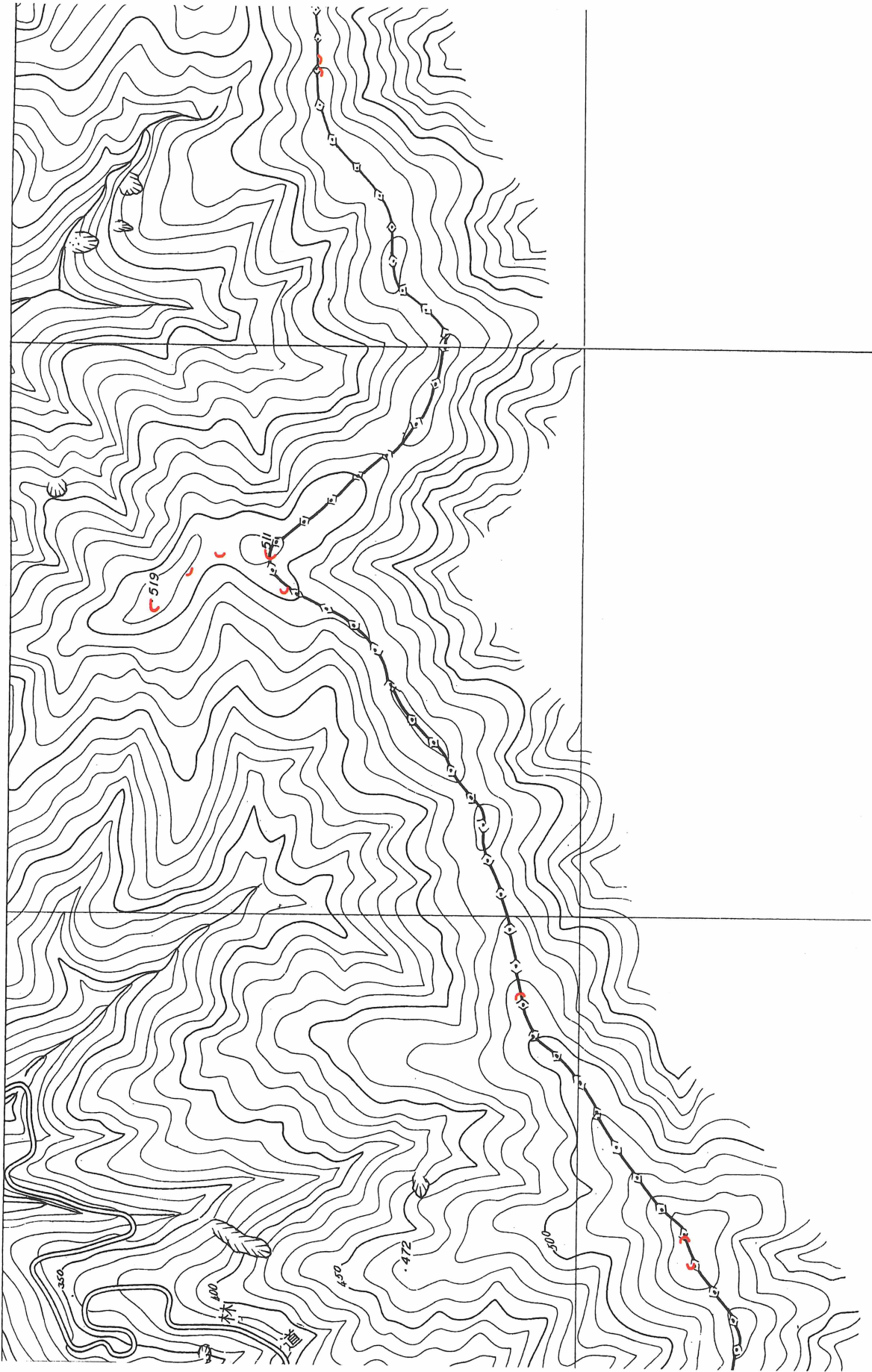


図23 大原越へ県境屈折点から中ノ嶺經由陸地峠台場分布図② (1/5,000)

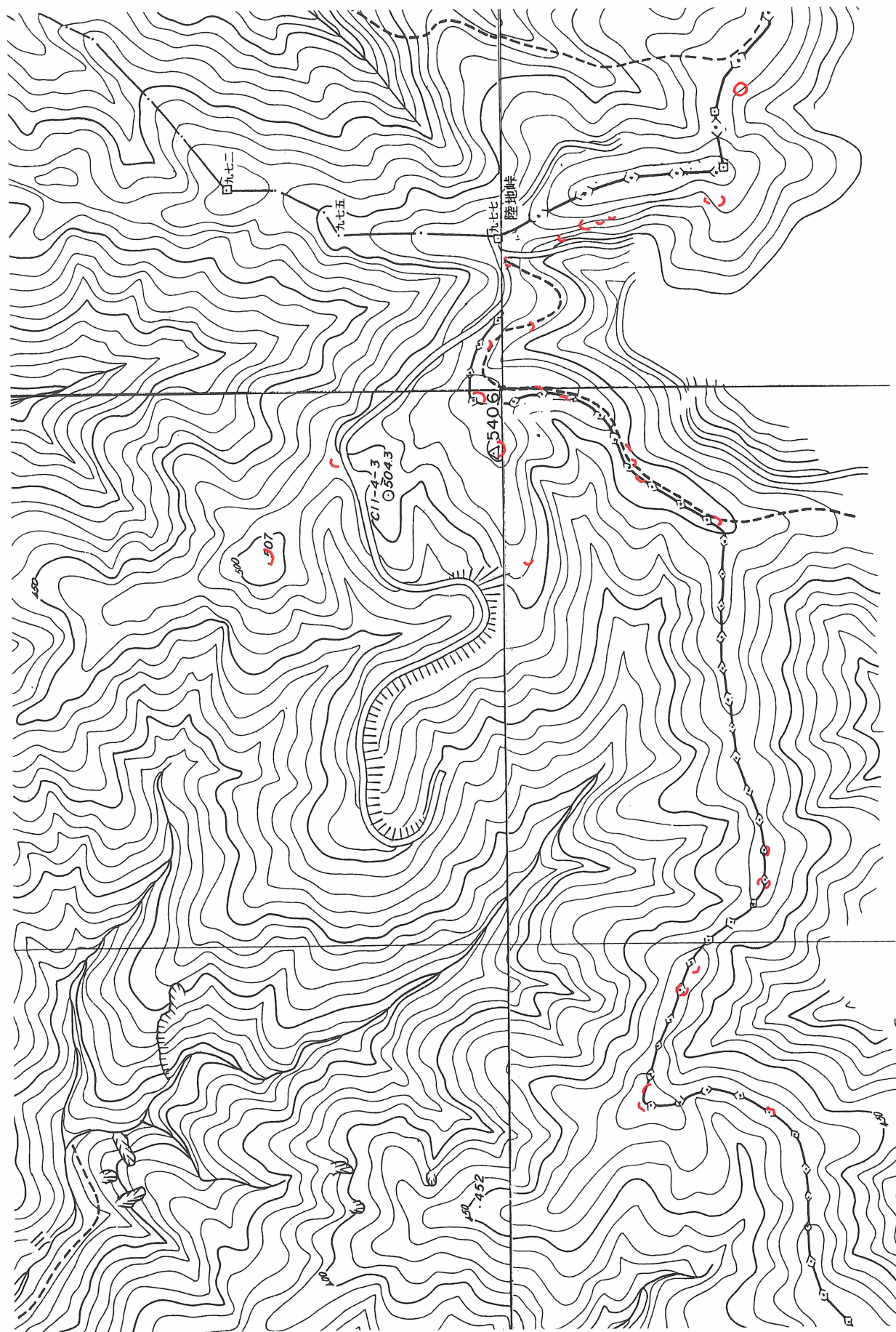


図24 大原越へ県境屈折点から中ノ嶺經由陸地峠台場分布図③ (1/5,000)

次の3基は南側を向いている。台場2基は480m等高線が廻る峰の頂上にあり、一は北西に短く続く尾根の先端をみつめ、他の一つは2m位離れて陸地峠側の尾根線を警戒している。10mほど西側に小型の台場らしきものが南向きにある。台場14の110mほど東に台場13が宮崎向きにある。少し下がった後、再び上りとなり台場が3基ある。西部の台場は大分側の斜面を向いており、東側の2基は反対向きである。そこから東に約300mの間は台場がない。次の「J」字形の台場がある部分はシキミ畑になっており、旧道沿いに台場を築いたらしい。次の台場の南側はシキミ畑で車も通れる小径があるが、旧道を踏襲しているのか。これから120mほど南側にも「J」字形の台場（図の外側にある）がある。ここから北側は旧道が尾根の上面を通っていたらしい。南側の最初の台場の北東68m付近に北西向きの台場がある。周辺は風倒木が多い。また、初めの台場から102mで長さ13mの土塁が尾根の東部に沿って続いている。南部は円くなっていた可能性がある。一ツ戸の頂上に達する手前に西向きの台場と東向きの台場がある。一ツ戸頂上は東西に長く、東部に台場がある。この台場は全体に内側の窪みがあり、中央に佐伯史談会の石碑が建っている。西部が頂上で、南向きの台場がある。中央部に540.6mの三角点がある。100m位西側に南西を向いた台場がある。この位置では西方の県境尾根から谷越えに一ツ戸を目指す敵を待ちかまえることができる。この尾根の続きを林道で区切られたところまで行って見たが、他にはなかった。

一ツ戸の東側、旧道を南に見下ろす尾根線に台場が南向きにある。その先は少し上りとなり、旧道に三方を取り巻かれた頂上に台場が南向きにある。これが峠の中央部にある台場である。ここは峠東側の峰を仰ぎ見る位置にある。陸地峠西側頂上付近の旧道がどのように通過していたのかは1/5,000図を見なければ分からない部分がある。林道工事のため削り取られているためである。

8. 佐伯市直川陸地峠西部一ツ戸

陸地峠西側の峰には東西に5基の台場が分布する。東部の4基は通常陸地峠を訪れる人が誰でも見るような位置にあり、南側を向いて造られている。西端の台場は雑木林の中に埋もれ、尾根の先端に西方を向いて造られている。

この先200m以上には台場はない。

9. 佐伯市直川（陸地峠から豊予要塞石柱に至る尾根）

陸地峠から東に約2 km続く尾根線は大分・宮崎の県境でもあるが、この区間に16基の台場がある。陸地峠のすぐ東側には上面の長さが200m位続く峰がある。ただ、道路工事のために北端部は削られており、西面も工事で崖面となっている。この峰は西側の峠よりも約30m高く、峠西側の一ツ戸峰よりも20m高い。したがって東側からは峠の西側峰を見下ろす形となる。

北端にある台場は道路工事で削られ北半分を欠くが、残った部分の形から見て本来峠方向を向いて造られたようだ。東側の2基の台場も峠方向を向く。

そこから東にある11基の台場のうち8基は南の宮崎県を向き、3基は尾根線の続く東方を向いている。全周囲掘り廻らされた台場が2基ある。

陸地峠から約2 kmの場所は三方向から来た尾根がぶつかる地点であり、頂上を掘り残す

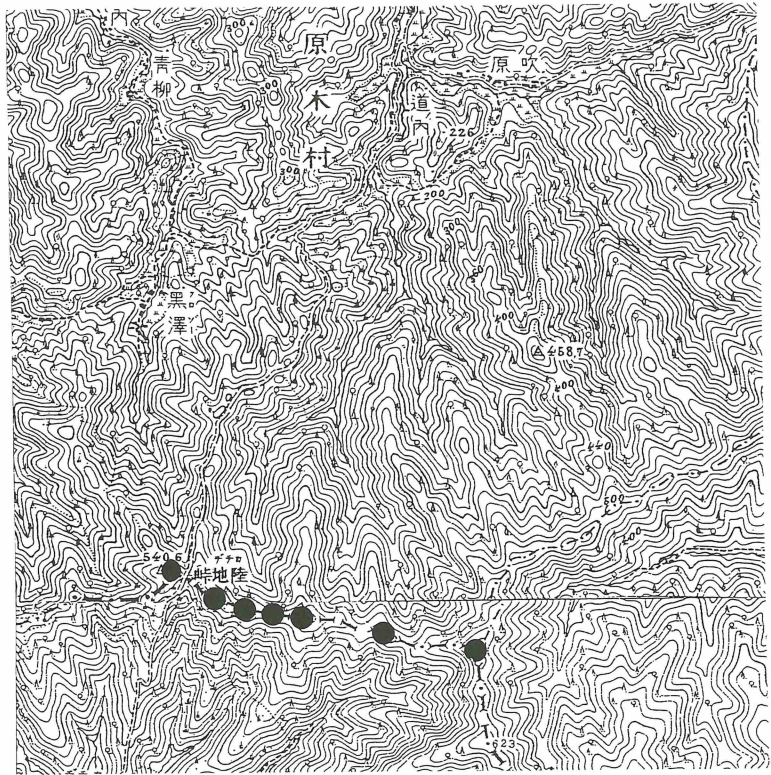


図25 位置図 (1/50,000)



写真26 陸地峠東部の峯を南から見る

ように三角形の台場がある（図28）。南側には小さく平地を削り出し、そこに一辺18.5cm四方の上面が四角の石柱が建っている。花崗岩製の地表に現れた部分が110cm、南面には「陸軍省」、西面に「昭和十五年十二月」、東面に「第二號」、北面に「F 2 32豊予要塞第三区地帯」と彫り込まれている。この付近に高射砲でも置こうとしたのであろうか。

この尾根線の台場の分布は西部に濃く、東部に薄い。薩軍が造った可能性があるのは宮崎を向いたものを差し引いて残った台場であり、合計8基である。東側を向いたものを含め、官軍はすべてを利用したとも考えられる。

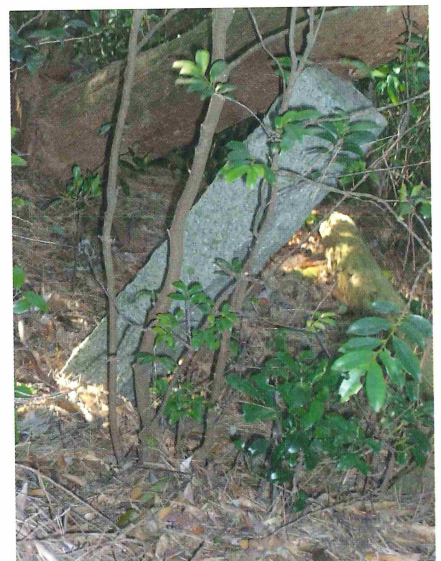


写真27 石柱

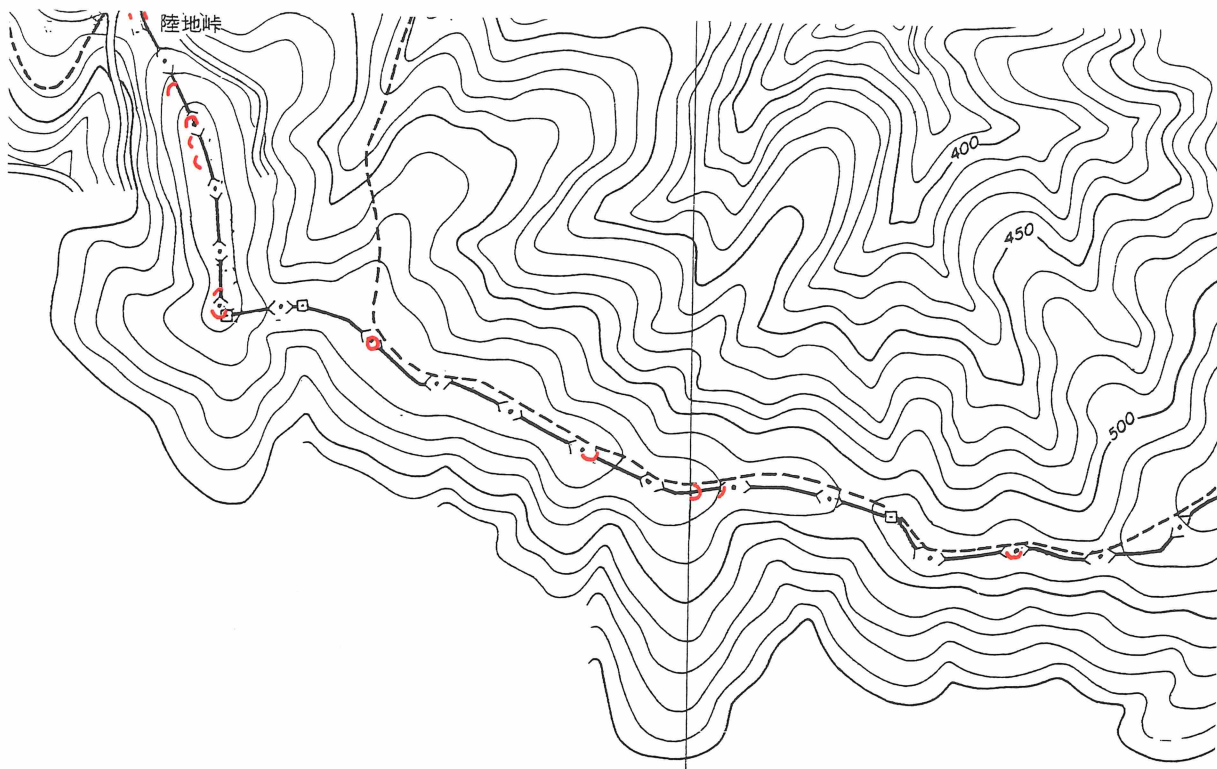


図26 陸地峠から豊予要塞石柱に至る尾根台場分布図① (1/5,000)

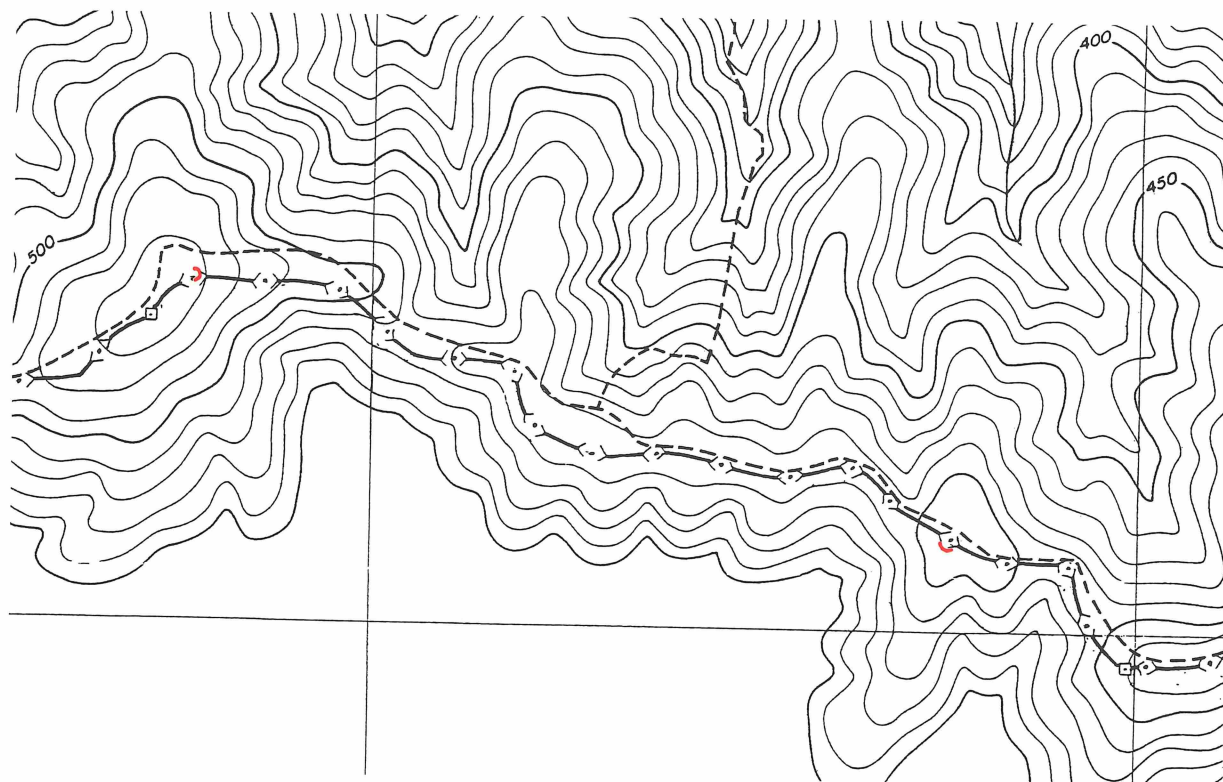


図27 陸地峠から豊予要塞石柱に至る尾根台場分布図② (1/5,000)

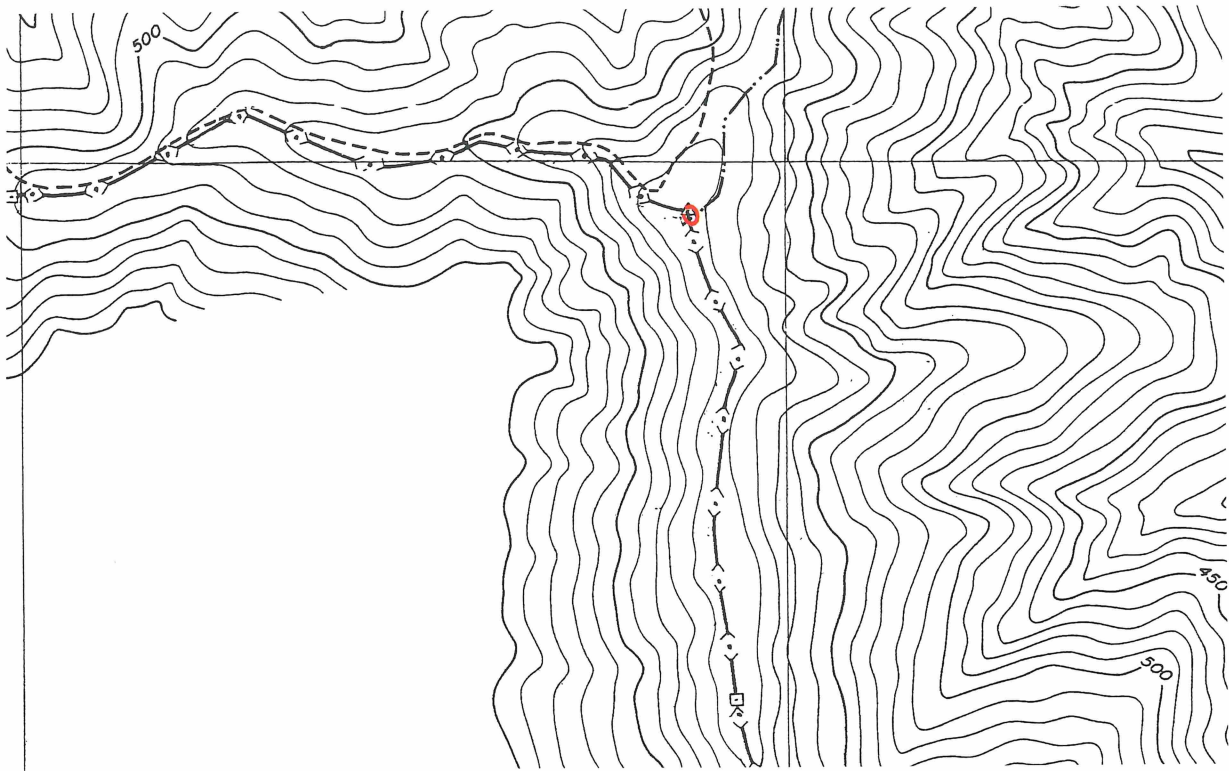


図28 陸地峠から豊予要塞石柱に至る尾根台場分布図③ (1/5,000)

10. 佐伯市直川（豊予要塞石柱から東北方向の尾根）

石柱から東北に続く尾根を約1500m先まで踏査した結果、石柱から750mまでの区間に12基の台場を確認した（図30）。

大部分は陸地峠の方を向いたり、斜面の下方を向いており、官軍が造ったものが大部分であろう。

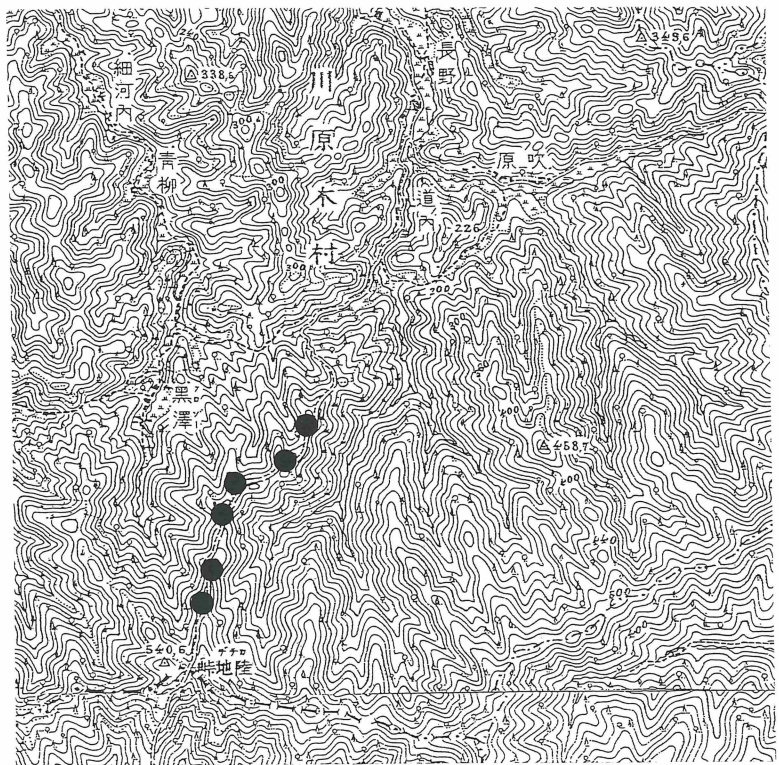


図29 位置図 (1/50,000)



写真28 東北尾根から西を見る

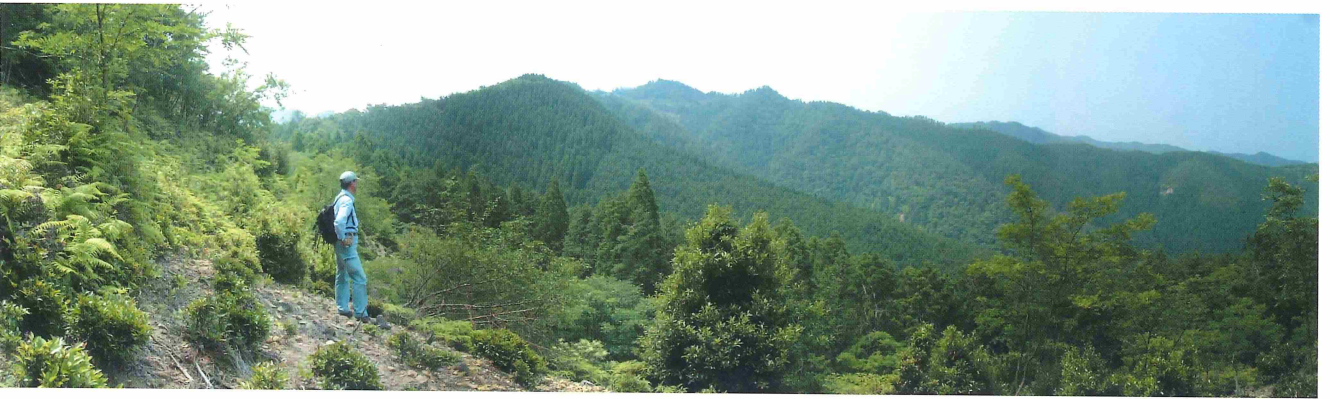


写真29 同上



写真30 石柱南東尾根から西を見る

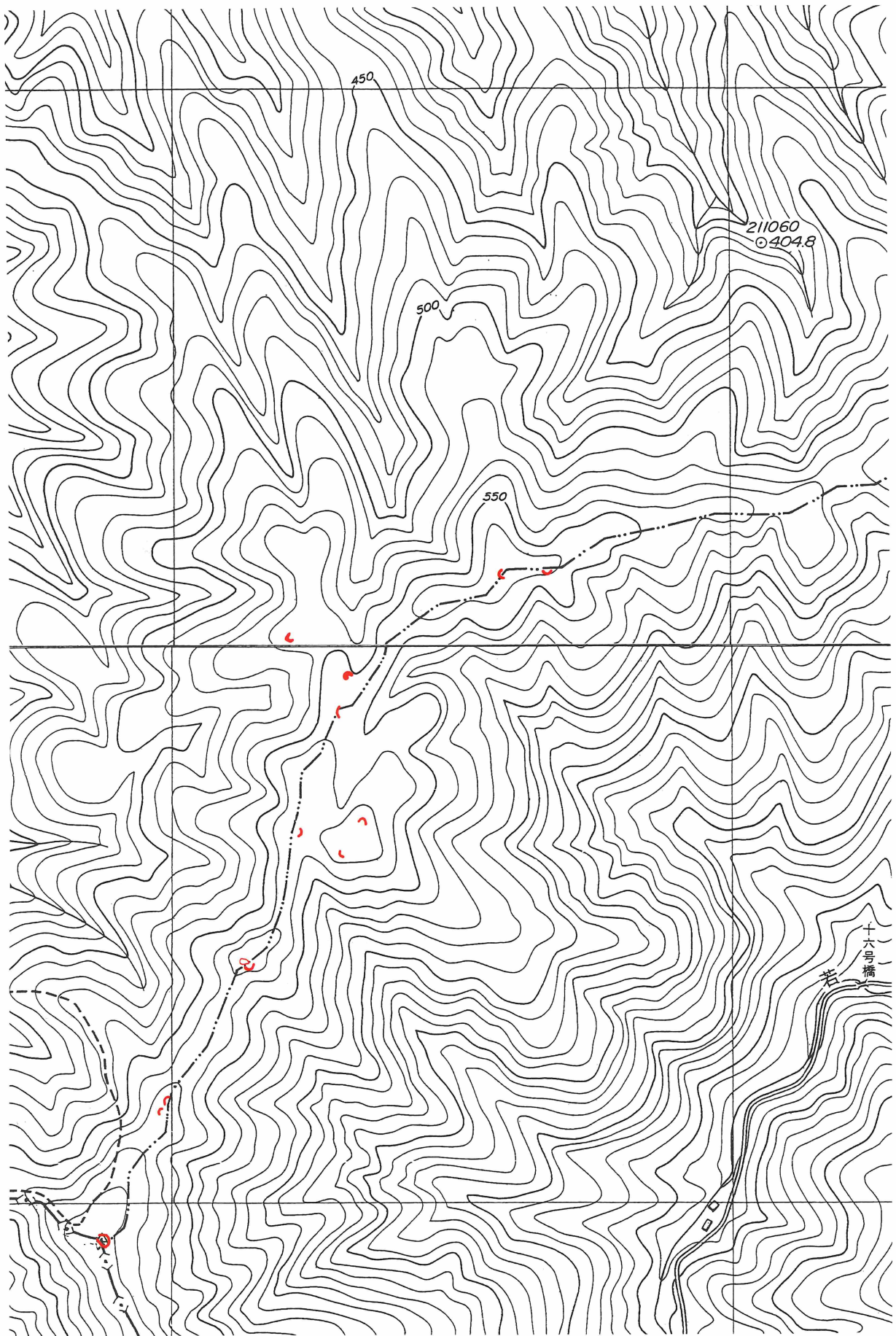


図30 豊予要塞石柱から東北方向の台場分布図 (1/5,000)

11. 佐伯市佐伯（豊予要塞石柱から南東方向の尾根）

石柱から南東へ続く尾根は高低差がほとんどない。石柱のある峰の標高は599mである。現在、宮崎県側斜面は伐採直後であり、見通しがよい。雑木林だったようだ。標識によると製紙用の伐採らしい。石柱から600mほど進んだ地点に東向きの薩軍が造ったと思われる台場があり、更に50m以上先の尾根線の曲がり角に大きな台場がある。ここは標高608mである。ここからは宮崎県方向の陸地集落の南側に向かって一本の長い尾根が下っている。台場は尾根の下から登り着いた地点で待ちかまえるように位置し、逆「J」字形台場に半円形台場を組み合わせたものである。同時に東方、石神峠方向の尾根を警戒すると共に、宮崎県側支尾根を警戒して造られたものである。官軍の台場であろう。



図31 位置図 (1/50,000)

最後の台場から南東に900mほど行くと尾根が三叉になるが、それまでの間に7基の台場がある。三叉から南に進めば下葛山（戦記の鳥平山？）に至る。踏査は三叉から北東に県境行き、枯椋山（664mの頂上は大分県側にある）頂上と周辺に何も無いの確認。東方2km強の石神峠までの間にも台場は確認できなかった。



写真31 図32左上の県境から西を見る



写真32 右上は陸地峠



写真33 図32右下から宮崎県内を見る

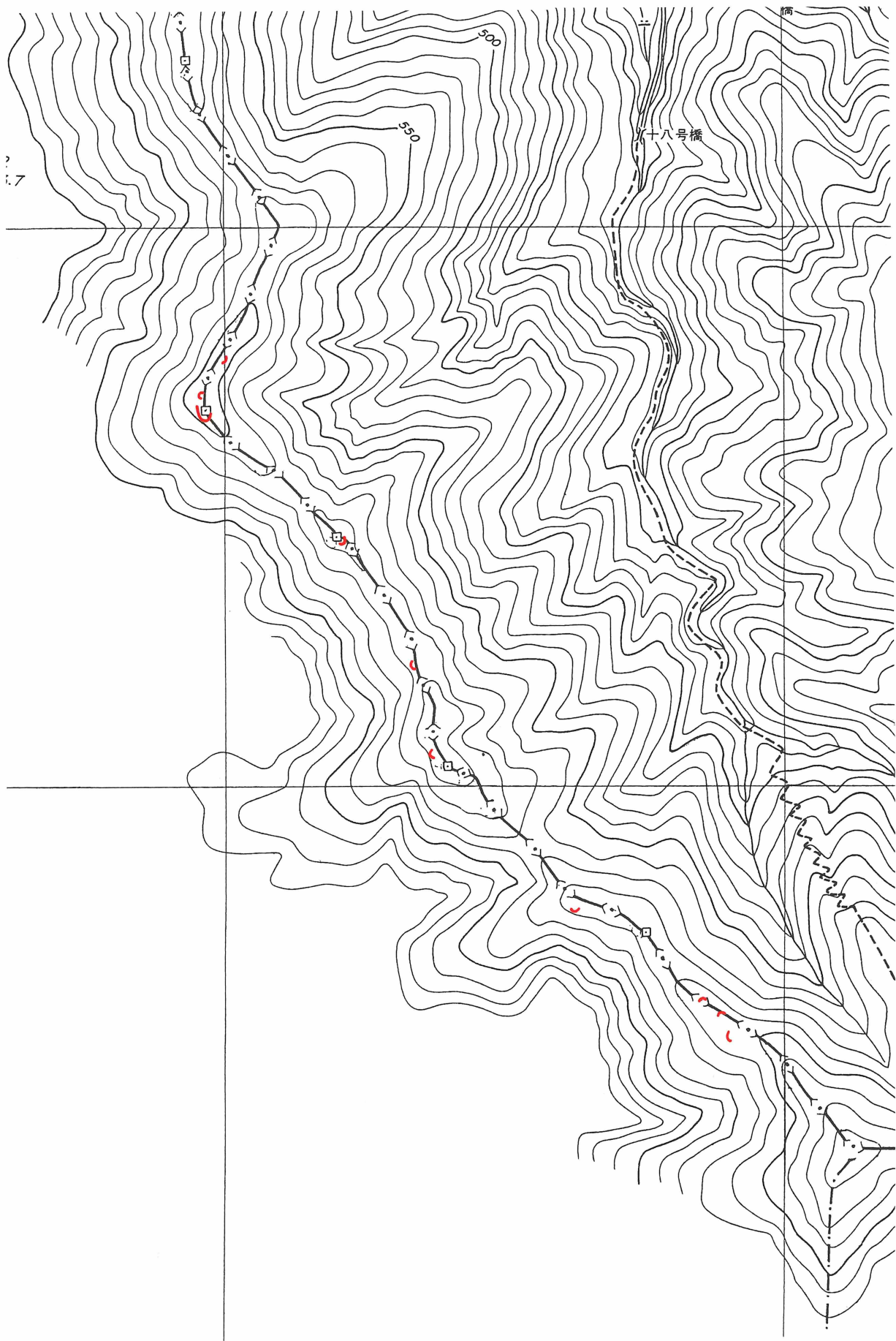


図32 豊予要塞石柱から南東方向の台場分布図 (1/5,000)

12. 佐伯市蒲江明石峠南部



写真34 県境から見た葛原

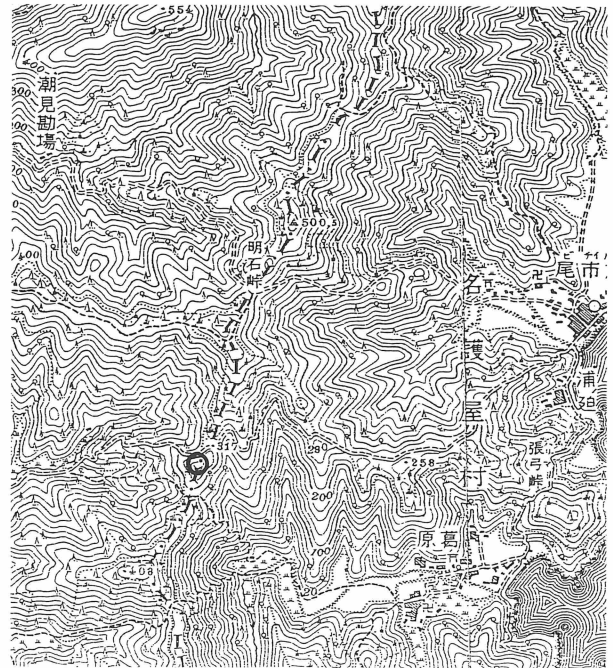


図33 位置図 (1/50,000)

佐伯市蒲江の丸市尾と宮崎県延岡市北浦町の市尾内を結ぶ国道388号線が県境を越える地点から北は昨年度分布調査している。ここから北方1400mにある明石峠までの間には4基の台場がある。今年度は国道388号線の南側を踏査した。大分県佐伯市蒲江の葛原浦と宮崎縣市尾内とを結ぶ道路までの間である。

北から踏査したが、急な上りはなく尾根からは眼下の葛原浦や豊後水道がよく見える。三角点（標高387m）は頂上にはなく、東北側の下がった場所にある。この一帯には台場はない。

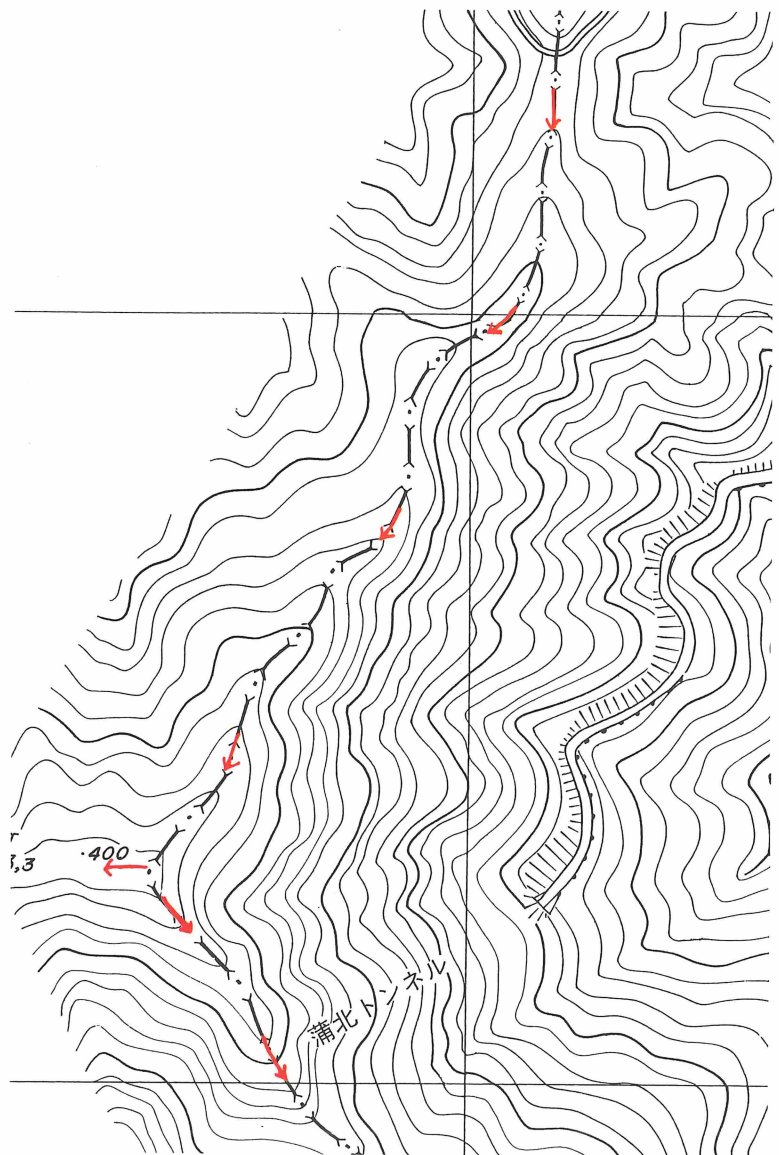


図34 明石峠南側分布調査地区 (1/5,000)

13. 竹田市街西側

竹田市市用に台場があるのを竹田市飛田川在住の藤島純高氏(竹田西南の役研究会会員)に教えていただいた。拜田原や中川神社方面の薩軍を攻撃する官軍部隊が竹田市北西に迂回して進んだ痕跡らしい。ここに台場があるということは周辺にも存在すると考えられるが、それらは今後の調査で明らかにしたい。中川神社西側からお兼様山までには5基の台場がある。市街南西側では鬼ヶ城(岡城跡のある丘陵の西端)の墓石に多くの銃撃痕が残っている。同様の銃弾の跡は中川神社の建物壁面にもいくつか残っている。これらも戦跡の一種である。鬼ヶ城では薩軍が墓石を楯に戦ったと記録されているその墓石であろう。

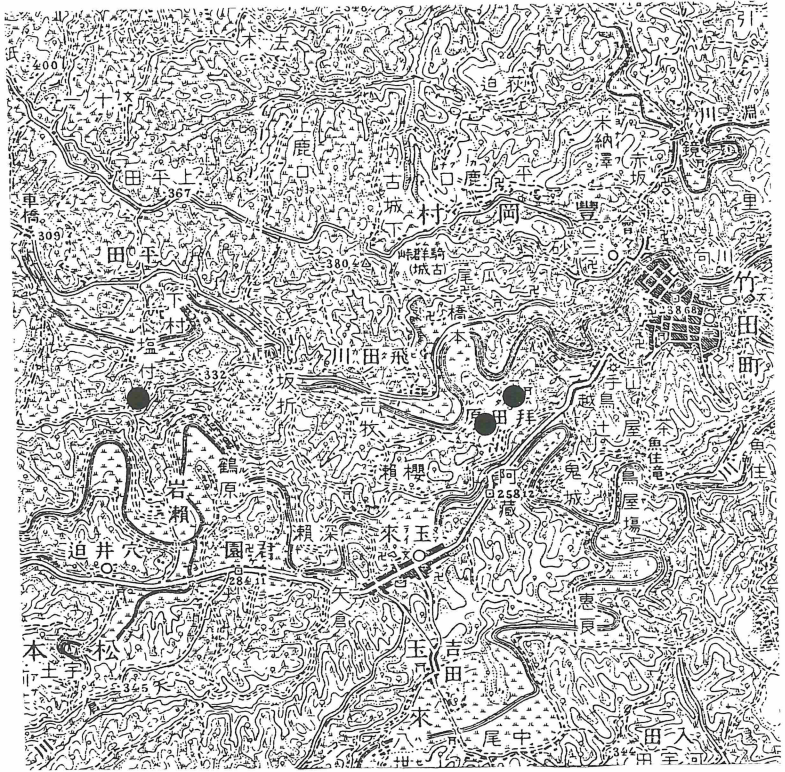


図35 位置図 (1/50,000「竹田」)



写真35 弾痕の多い墓石群



写真36 上部に弾痕

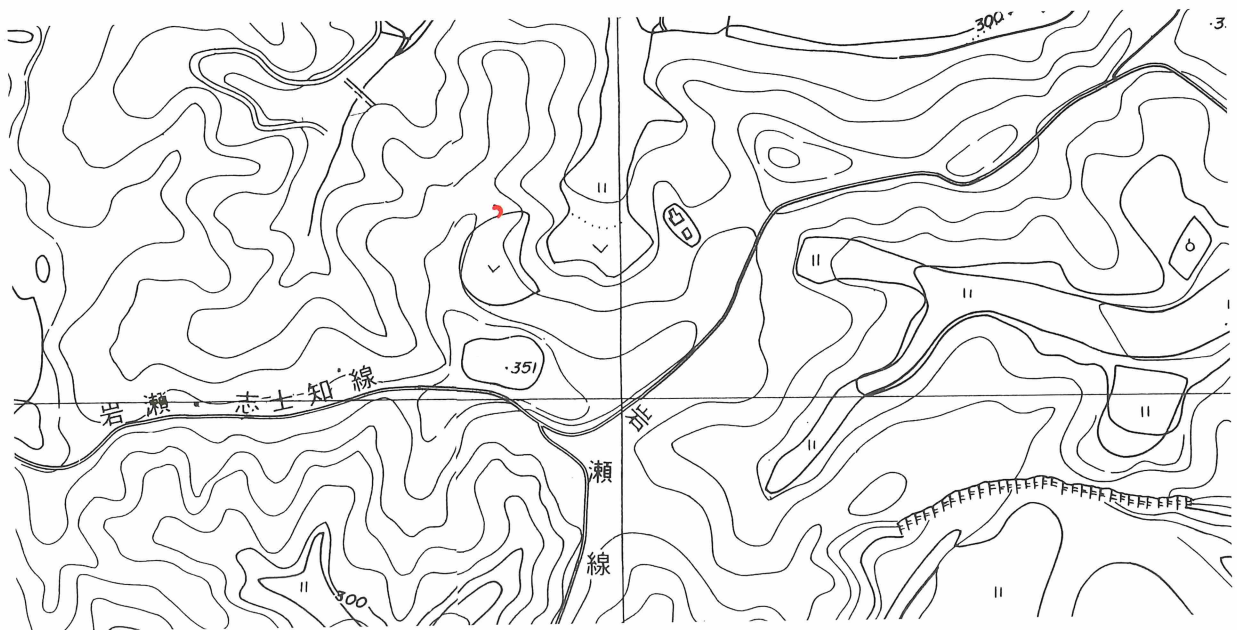


図36 竹田市市用 (1/5,000図)

小 結

今年度もいくつかの地域で分布調査をおこなったが、ここでは集中的に調査した陸地峠周辺の県境地帯における戦闘経過について概要を時間経過の順に示すことにする。

この地域の戦闘についてはいくつかの史料がある。官軍側には西南戦争全体の陸軍の準正式記録「征西戦記稿」や一部隊の記録「第十四聯隊第二大隊日誌」、「隈岡大尉陣中日誌」があり、薩軍側には陸地峠の配置について部隊の記録「明治十年薩軍資料」や加治木常樹著「薩南血涙史」がある。また、戦後収監された薩軍参加者の上申書「西南之役懲役人筆記」にも当事者の記述が多数ある。「征西戦記稿」の関係部分を軸に、分布調査で確認した台場群がどの時点で官薩両軍のどちらによって造られたのか見ておきたい。

6月20日：「諸兵進テ脇尾龍峠細田陸地峠等ヲ守備シ・・・」

19日から20日に薩軍は県境を越え、宮崎に退いた。その直後、官軍が代わって陸地峠の守備を始める。

6月21日：「臼杵口ノ右翼兵^{第十三聯隊}第三大隊 ハ大原峠ヲ守備シ重岡口ノ左翼伏部越ト連絡ス其左翼陸地峠ノ哨兵、賊ノ斥候ニ遇ヒ戦フ事須臾ニシテ賊退ク」

大原峠は陸地峠の西方に位置するらしい。

6月22日：「重岡口ノ兵臼杵口ト連絡シ重岡ノ右翼柳ヶ瀬ヨリ左翼黒澤ニ至リ日豊ノ國境、戦線十餘里、各々胸墻ヲ要所ニ築キ嚴ニ之ヲ守備シ時機ニ投シ進撃、延岡ニ至ラントス」

官軍は西方の柳ヶ瀬・梓峠・黒土峠、中央の赤松峠・豆殻峠・大原峠から東端の陸地峠まで延々と守備につき、宮崎県内に進む準備を整えた。

6月24日：「佐伯口ノ兵ハ松葉ニ進入セントシ亦反テ賊ノ侵襲ヲ受ケ陸地峠ニ防戦ス又工兵ヲ遣リ胸墻ヲ築テ守備ス」

この日、薩軍奇兵隊は全力で陸地峠と重岡方面を突破しようと早朝から襲来してきたが、陸地峠では薩軍の一部が前夜山道に迷ったため、本格的な攻撃は翌25日となった。官軍も一部の部隊が偵察を兼ねて宮崎県内に進んだが、北上する薩軍と遭遇して交戦しつつ、県境尾根まで撤退した。

6月25日：「是日午前七時三十分、賊大挙、我陸地峠ヲ襲フ其東方深山ヨリ迂回スルヲ以テ別働遊撃ノ二中隊防戦スル能ハス壘ヲ棄テ退走ス右翼諸隊為メニ敵ヲ背後ニ受ケ已ムヲ得ス守線ヲ斜メニシ杭之内村及ヒ細川内ノ山脉ヨリ延テ赤木ノ山上ニ至リ纔ニ之ヲ守備ス賊遂ニ陸地峠ノ要處ヲ守備ス仁田原口ハ陸地ノ大敗走ヨリ右翼重岡黒澤ノ連絡ヲ裁斷セラル」

薩軍では前夜道に迷った部隊も揃い、東南西の三方から陸地峠を襲い、官軍は国道10号まで退く。以後7月16日まで県境尾根は薩軍のものである。

6月28日：「仁田原口漸ク戦線ヲ進メテ賊壘ニ接近シ工兵ヲ遣リテ胸墻及ヒ厩舎ヲ造リ又左翼半助森ヲ野崎中佐ノ隊ニ交付シ地形ヲ探偵シ大舉陸地ヲ恢復セントス」

官軍は県境から大分県内に延びた支尾根に取りつき、薩軍に接近して台場や休憩所を築いた。

7月2日：「昧爽大原越ノ哨線ヲ襲ヒ鋭進壘下ニ迫ル守兵防戦右方ノ諸壘モ亦應援發火ス賊須臾ニシテ去ル」

大原越へを攻めたのはここに官軍を引きつける薩軍の陽動作戦だった。翌3日、薩軍は西方の梓峠に兵力を集中して突破し、水ヶ谷・黒土峠までを奪った。

7月4日：「午前三時、三道ヨリ額返山ノ賊ヲ撃ツ彼天嶮ノ壘ヲ固守シ我カ正面及ヒ側面ヲ狙撃ス我兵進ム能ハス七時舊線ニ復ス」

額返山とは陸地峠の西方の峰、一ツ戸の西側にある峰であろう。

7月5日：「仁田原口ハ午前三時陸地峠ノ賊壘ヲ攻撃シ左翼八丁越ノ山脈ニ縁リ賊壘ノ左側ニ迂回シ正面右翼モ各共ニ進撃シ迂回兵ノ達スル機ニ乗シ突貫ヲ行ハントスル既ニ右翼ハ天狗山ノ頂上ヲ畧取シ中央ハ陸地峠ノ賊ト五百米突ノ地ニ接近スト雖モ左翼ノ迂回兵其志ヲ達スル能ハスシテ日モ亦暮ルヲ以テ各々胸墻ヲ其處ニ築キ守備ヲ嚴ニス」

陸地峠の東北方向2 kmに八丁という三角点がある。官軍はこの山脈を経て薩軍の東側に迂回部隊（官軍左翼）を廻し、陸地峠（中央）、右翼の三方からの攻撃を計画していたが、左翼が思い通りにゆかなかったため失敗した。しかし、天狗山（場所不明だが記述からは峠の右翼、西側に位置することが分かる）は官軍のものとなった。

7月6日：「賊重岡ノ大原口ヲ襲フ防戦スル須臾ニシテ賊去ル」

7月7日：「野津大佐兒玉少佐黒澤方面進撃ノ地理ヲ偵察ス」

野津大佐は野津道貫、薩摩出身。日露戦争時の第四軍司令官、後元帥。兒玉源太郎は長州出身。後、台湾総督、日露戦争では満州軍総参謀長、後、陸軍参謀総長。陸地峠の東方、石神峠の薩軍守備が嚴重でないことを掴んだ官軍は、後日ここから県境を突破する。

7月8日：「仁田原口陸地峠ノ左側八丁越ヨリ半助森等ノ地形ヲ搜索ス又深谷ニシテ進ム能ハス」

7月12日：「午前三時開戦シ正面ハ臺兵石神峠ヨリ賊壘ヲ射撃シ警視四番小隊ノ半隊ハ其壘後ニ迂回シテ夾撃ス須臾ニシテ賊器械ヲ棄テ梅木ニ走ル尾撃數壘ヲ抜き進テ鳥平山ヲ領シ三河内ニ入ル然レノモ地形ノ不利ナルカ故ニ退テ守線ヲ鳥平山ニ定ム」

石神峠は薩軍側守備の手薄な地域であり、装備も火縄銃程度であった農兵が守備中だったためすぐに敗走した。

7月16日：「陸地峠及ヒ額返攻撃ノ兵ヲ部署スル左ノ如シ」

として官軍は攻撃する方面を本道・天狗山ヨリ陸地峠・杓ノ内口・旗山口・内水口・大原口に分けている。それぞれの口は県境尾根から大分県内に延びた南北方向に走る複数の支尾根に相当するらしく、順番も地理的に東か

ら西に向かって記述していると考えられ、分布調査の解釈にとって重要な部分である。

陸地峠から西には、県境尾根から集落のある麓まで北側に続く長い尾根は6本しかない。つまり南北尾根は①陸地峠から北への尾根、②一ツ戸と1/5,000地図に記載された峰から北への尾根、③杣ノ内に至る尾根(これによって額返山の位置が判明する)、④中ノ嶺の西山から北に延びた尾根、⑤内水に至る尾根、⑥大原に至る尾根、を意味すると理解できる。中ノ嶺という地名は西南戦争当時の記録には現れない。旗山というのが中ノ嶺のことではないかと思う。⑤と⑥は南東部で分岐している。額返というのも場所不明だが、中ノ嶺の東1kmにある510m等高線の廻る峰、すなわち杣ノ内に至る尾根の南端に聳える峰のことであろう。

以下も7月16日の記録である。

「仁田原口ノ撰抜兵午前二時風雨ニ乗シテ發シ部署表ニ示セル如ク一ハ陸地峠本道一ハ天狗山ヨリ陸地峠ノ壘下ニ潜進シ兩道一齊吶喊衝突シ忽チ數壘ヲ拔キ更ニ援隊ヲ増シ額返ノ壘ニ迫ル是ノ時大原口内水口ノ兵モ亦前面ノ數壘ヲ拔キ追撃ス賊轉シテ我カ旗山口ノ兵ヲ撃ツ一時激戰會々我杣ノ内口ノ兵賊ノ背後ニ出ツ彼レ狼狽兵器ヲ棄テ走ル追テ袖ケ内村ノ山頂ニ至リ第一ノ守線ヲ設ケ陸地峠ノ第一線連絡ス時既ニ午後三時ナリ是ニ於テ陸地額返ノ險皆我有ニ歸ス工兵半小隊直チニ胸壁二十三個ヲ第一線ニ築キ鹿柴ヲ植エ守備ヲ嚴ニス陸地峠ハ此方面最要衝ノ地ナリ今之ヲ獲ルヤ大ニ攻撃ノ便ヲ占メ影響ノ及フ所他ノ諸線ヲ利スル亦尠カラス」

天狗山・旗山の場所を特定するため宮崎側の北川町教育委員会に字図を提供して頂いたが判明しなかった。「征西戦記稿」の記述によれば、天狗山からは陸地峠の台場下に直接通じるようであり、天狗山というのは陸地峠のすぐ西側にあり1/5,000図に一ツ戸と記されている峰のことらしい。

以上、佐伯市の県境地帯での分布調査結果と戦記を比較し、それらの対応関係を把握することが可能であることがわかった。詳しくは後日検討したい。

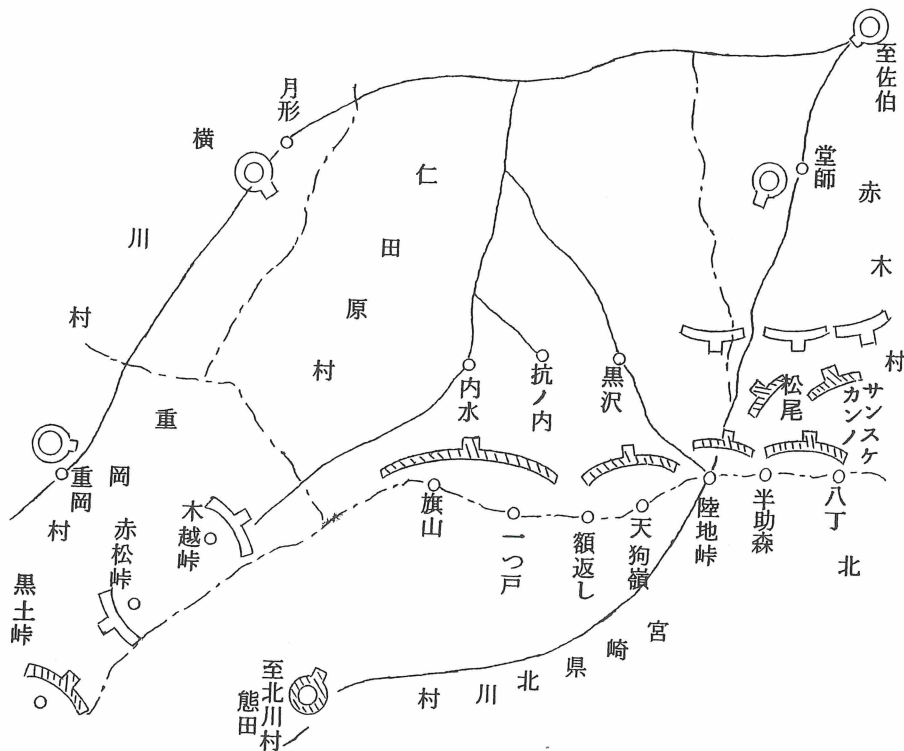


図37 「西南の役と直川」直川村教育委員会1993より

今年度の分布調査は佐伯市県境地帯と竹田市で実施し、多数の台場を確認した。この結果、これまでに佐伯市の県境地帯で判明した台場の分布調査結果をまとめると第38図のようになる。

県境地帯の台場分布図を作成して明らかになった点は分布の偏りが存在することである。西部の佐伯市宇目(旧宇目町)水ヶ谷周辺から佐伯市直川(旧直川村)陸地峠東部までに特に集中する反面、石神峠西側から場照山南側までに空白域があり、そこから大分県南端の陣ヶ峰までには若干分布している。この図中には未踏査地区も多く含んでいるが、全体の踏査を終えたとしても分布に偏りがあるという点は大きな修正は生じないように思える。

これ以外にも大分県内では竹田市・三重町・佐伯市本匠(旧本匠村)等に台場が分布しているが、未だ詳細は明らかではない。現状では上図に示した旧宇目町から佐伯市西端部までが県内における分布の中心地帯である。

竹田市では古城(騎牟礼城)・法師山だけで台場を確認していたが、市域の西部にも分布を確認した。対象地域を拡張する必要がある。

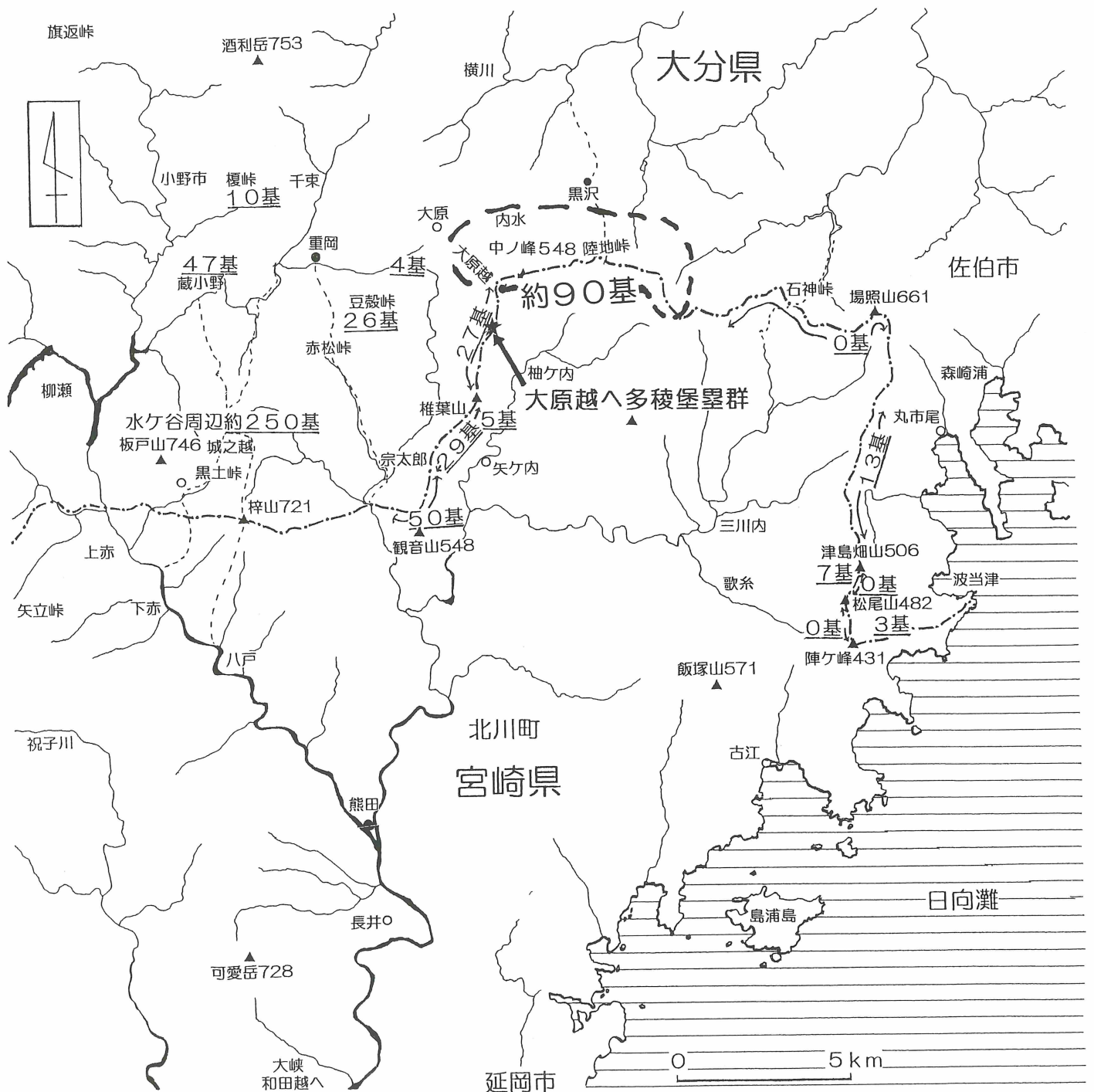


図38 大分宮崎県境地帯の台場確認基数

報告書抄録

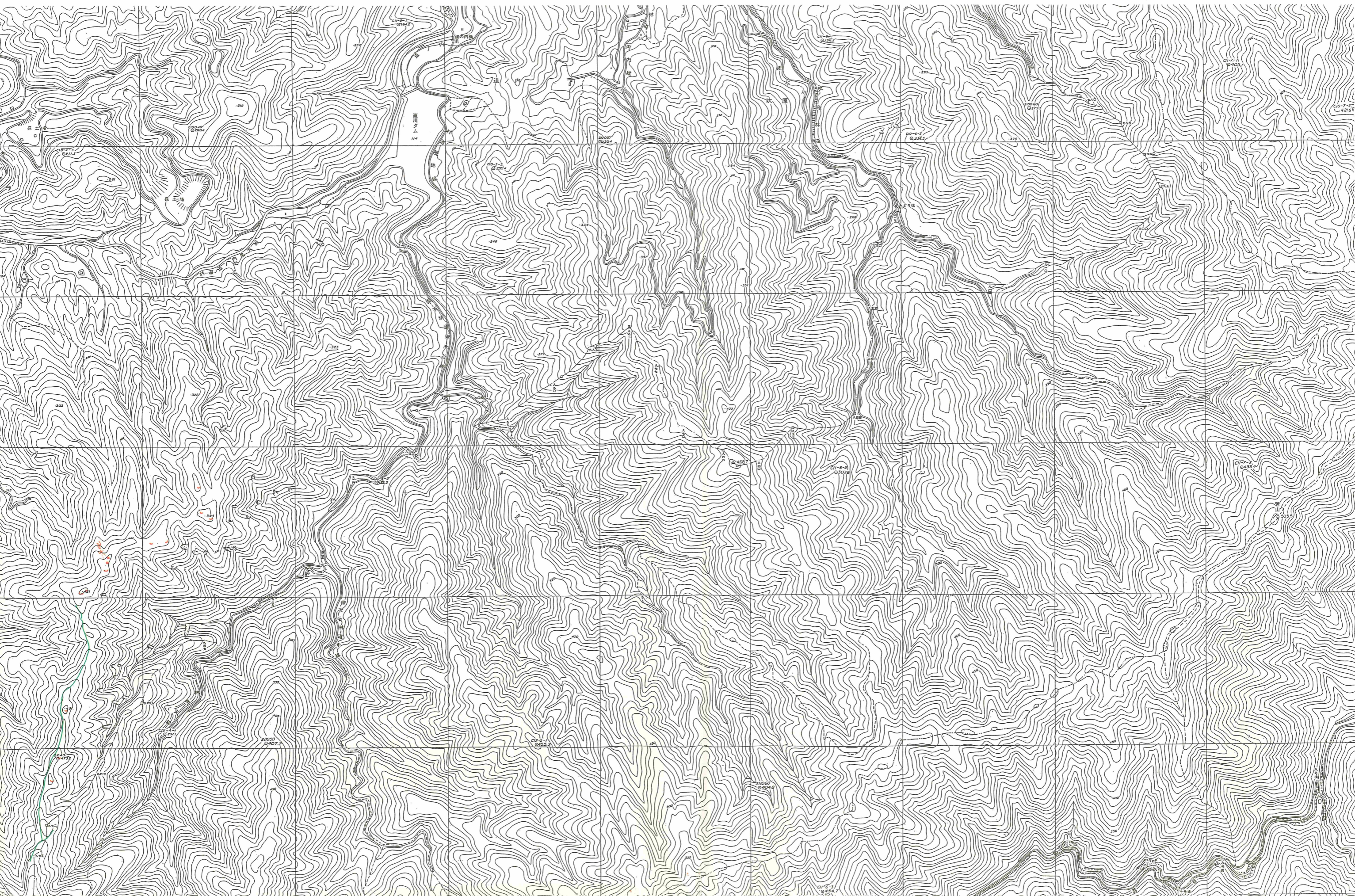
ふりがな	おおいたけんないせきはつくつちょうさがいほう	シリーズ番号	第10号
書名	大分県内遺跡発掘調査概報	編著者	高橋信武・小林昭彦・甲斐寿義・綿貫俊一
副書名		編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
巻次		所在地	大分市中判田1977
シリーズ名	大分県埋蔵文化財センター調査報告	発行年月日	平成19(2007)年3月31日

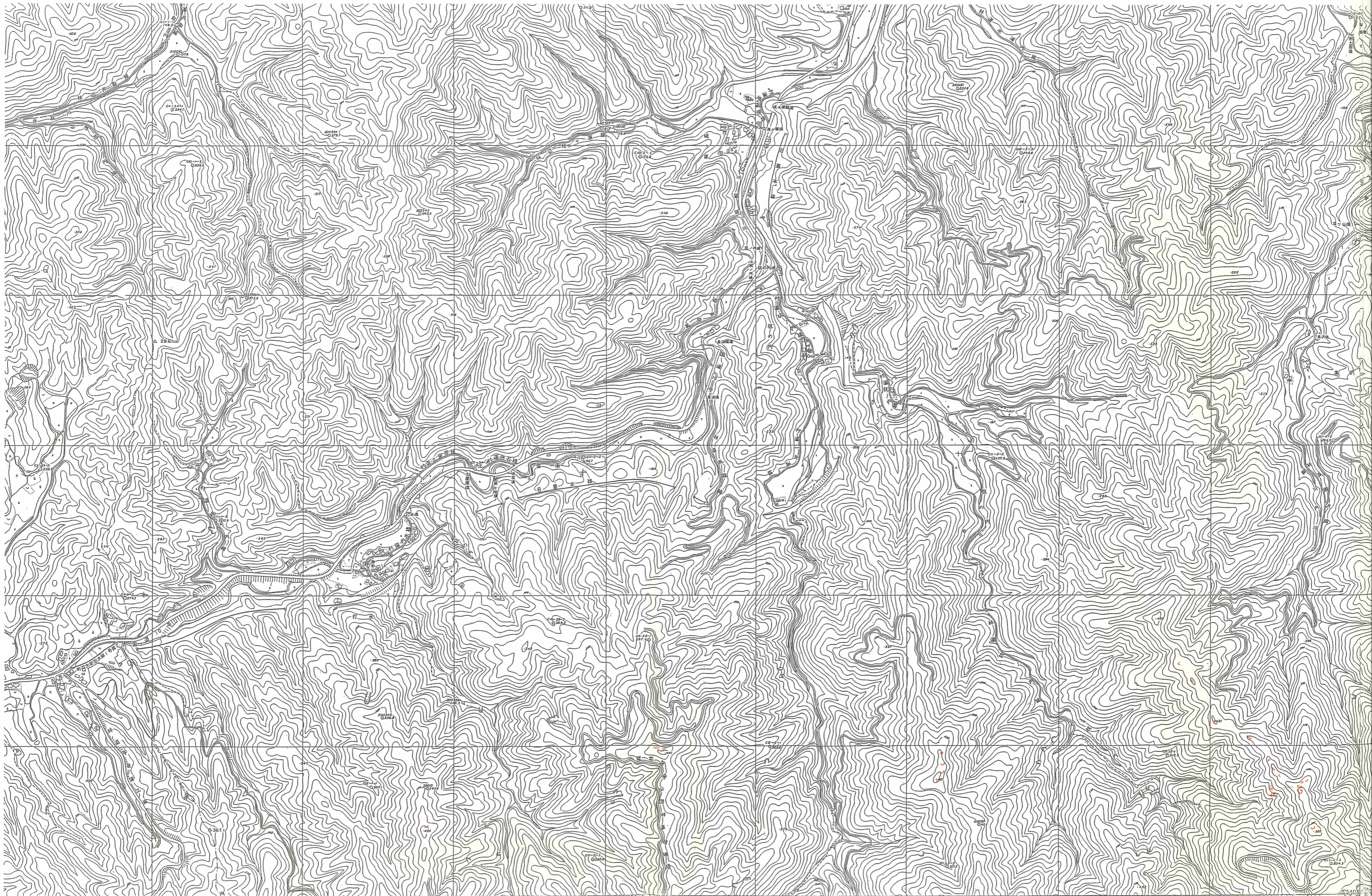
ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村					
							分布調査

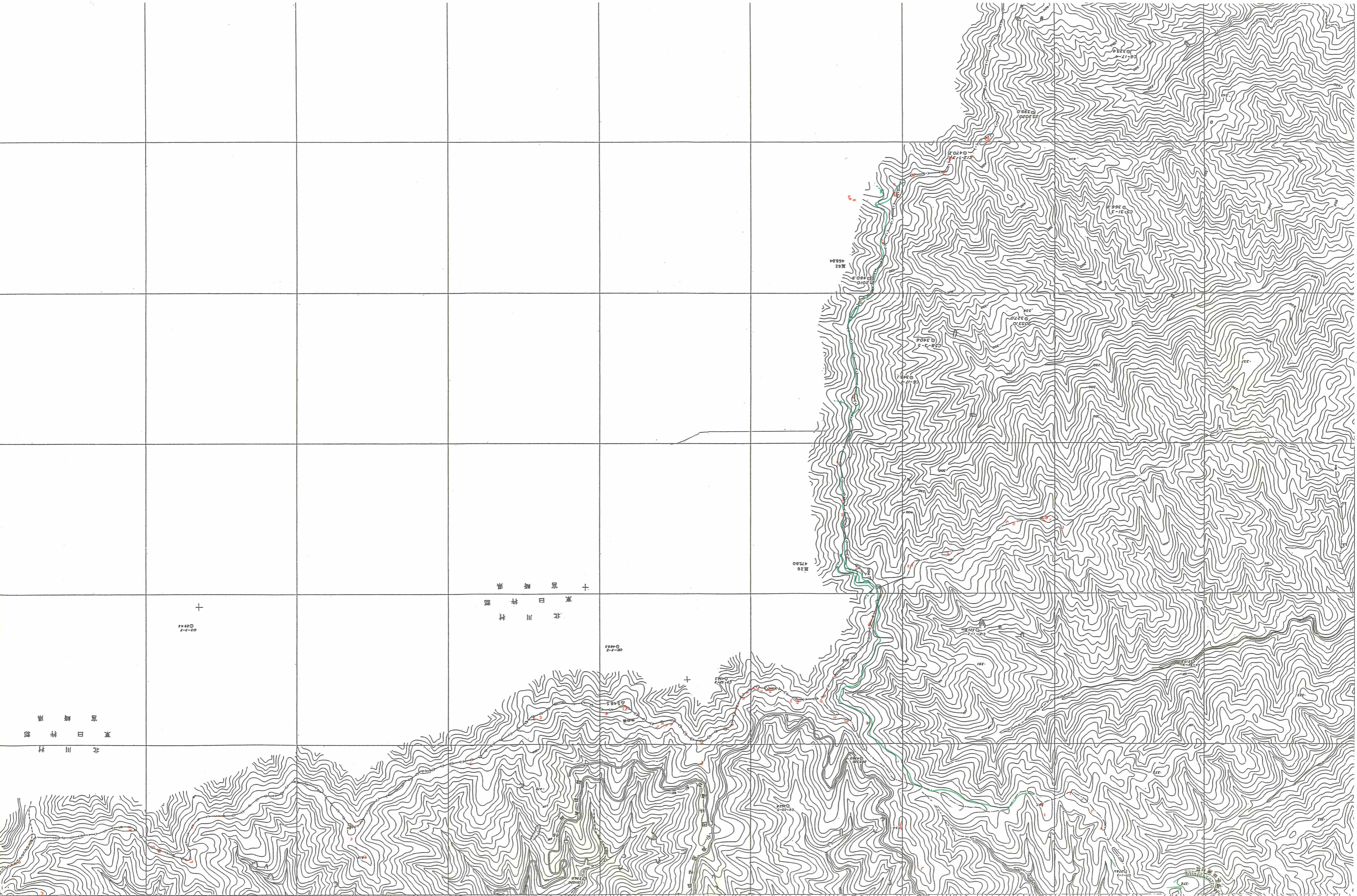
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項

大分県内遺跡発掘調査概報10

発行年月日 平成19(2007)年3月30日
 編集 大分県教育庁埋蔵文化財センター
 所在地 〒870-0011 大分市大字中判田字ピアノ門1977番地
 印刷 元屋印刷株式会社
 佐伯市鶴谷町3-1-9







北三社
東四半部

十
02-3-7
02345

北三社
東四半部

「大分県内遺跡発掘
調査概報10」2007
大分県教育庁
埋蔵文化財センター

方眼は500m

